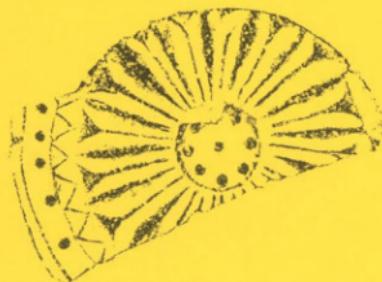


# 高松市内遺跡発掘調査概報

－平成18年度国庫補助事業－



2007年3月

高松市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、高松市教育委員会が平成18年度に国庫補助事業として実施した高松市内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
- 2 本書には平成18年度事業のうち、平成18年4月から12月にかけて実施した試掘調査9件について収録した。なお、概報印刷時期の関係で昨年度概報に収録できなかつた平成18年1月から3月の試掘調査と平成17年度史跡天然記念物屋島基礎調査事業についても収録した。
- 3 調査は、高松市教育委員会文化部文化振興課 文化財専門員 川畠聰・山元敏裕・小川賢・渡邊誠・中西克也・西澤昌平が担当した。
- 4 本書の執筆は調査担当者が行い、編集は川畠が行った。ただし、金石2号墳の墳丘については、徳島文理大学 助教授 大久保徹也氏より玉稿をいただいた。
- 5 調査の実施にあたっては、次の機関および方々の御指導・御協力を得た。（敬称略、五十音順）穴吹興産㈱、㈱穴吹工務店、㈱アルペン、香川県教育委員会、㈱ジョーソンドキュメンツ、高松東病院、文化庁、屋島寺  
石松好雄、岩部注連一、狩野久、危田修一、小池三治、丹羽佑一、箱崎和久、平尾昌一、藤本悦子、占田重幸また、金石2号墳の調査では、下記の方々のボランティア参加があった。  
大久保徹也助教授、池見渉、石本達也、市吉直史、中島美佳、三好雄一、渡邊真衣（以上、徳島文理大学）、小羽由夏（立命館大学）
- 6 本書の挿図として、高松市都市計画図2千5百分の1および2万5千分の1を一部改変して使用した（調査地位置図1/5,000等）。
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 8 本報告書の高度値は、海拔高または地表面からのマイナス値を表わす。方位は、T. Nが座標北、M. Nが磁北を表している。

## 目 次

第1章 平成18年1月～12月 高松市内遺跡発掘調査事業	
多肥下町山道地区（店舗建設）	3
香西東町新田地区（都市計画道路建設）	3
桜町二丁目（宅地造成）	4
日暮・松林遺跡（共同住宅建設）	4
林町亀ノ町地区（事務所建設）	5
平尾1号墳（自然崩壊）	6
西下遺跡（校舎増築）	15
多肥下町下所遺跡（消防署建設）	15
金石2号墳（内容確認）	17
岡山小古墳群11号墳（病棟新築）	26
日暮・松林遺跡（事務所建設）	29
史跡讃岐国分尼寺跡（内容確認）	35
第2章 平成17年度 史跡天然記念物屋島基礎調査事業（屋嶋城跡）	41



第1図 平成18年1月～12月 高松市内遺跡調査地位置図（縮尺1/150,000）

## 第1章 平成18年1月～12月 高松市内遺跡発掘調査事業

### た ひ しもまちやまみち ちく 多肥下町山道地区

- 調査地 高松市多肥下町
- 調査期間 平成18年1月11日
- 調査担当者 川畠聰、渡邊誠
- 調査の原因 店舗建設
- 調査の概要

調査地は多肥松林遺跡や日暮・松林遺跡に隣接することから、事業者である㈱アルペンと協議を行い、事業者の任意協力により試掘調査を実施することになった。

5本のトレーンチ調査の結果、調査地の大部分は南の多肥松林遺跡(高松桜井高校)で検出された旧河道の続きであることが確認された。この旧河道は、調査地北端で北東および北西へ分岐しており、調査地外の北側に微高地が存在している。旧河道の時期は、出土遺物が希少であるため不明だが、多肥松林遺跡の調査成果より弥生時代～古代のものと考えられる。

#### 6.まとめ

埋蔵文化財が確認されなかったため、今回の調査対象地は、保護措置の必要がないものと判断した。  
(川畠)



第2図 多肥下町山道地区調査位置図

### こうざいひがしまちしんでんちく 香西東町新田地区

- 調査地 高松市香西東町
- 調査期間 平成18年1月16・17日
- 調査担当者 川畠聰、渡邊誠
- 調査の原因 都市計画道路郷東榎紙西線街路事業
- 調査の概要

都市計画道路郷東榎紙西線予定地内において、側溝建設工事が計画されたため、工事中に試掘調査を実施した。

調査地周辺部は地割が乱れていることから、本津川の旧河道であることが想定された。調査の結果、旧水田土壤層より下位は砂層となっており、埋蔵文化財は確認されなかった。

#### 6.まとめ

埋蔵文化財が確認されなかったため、今回の調査対象地は、保護措置の必要がないものと判断した。  
(川畠)



第3図 香西東町新田地区調査位置図

さくらまち に ちょう め  
**桜町二丁目**

1. 調査地 高松市桜町二丁目
2. 調査期間 平成18年3月8・9日
3. 調査担当者 川畠 聰
4. 調査の原因 宅地造成
5. 調査の概要

調査地は東中筋遺跡の東側隣接地であることから、事業者である穴吹興産㈱と協議を行い、事業者の任意協力により、掘削深度が深い擁壁建設工事中に試掘調査を実施することになった。

調査地東側に設定したトレーナーでは、工事による掘削深度が地表から約20cmに留まることから、確認された遺構は江戸時代以降の土坑群のみであった。

6.まとめ

埋蔵文化財が確認されなかつたため、今回の工事における事前の保護措置は必要ないものと判断した。ただし、今回の掘削深度が浅いため、包蔵地か否かの判断はできなかつた。



第4図 桜町二丁目調査地位置図

ひぐらし まつばやしい せき  
**日暮・松林遺跡** (共同住宅建設)

1. 調査地 高松市多肥上町
2. 調査期間 平成18年4月25日
3. 調査担当者 川畠 聰, 中西克也
4. 調査の原因 共同住宅建設
5. 調査の概要

調査地は日暮・松林遺跡に隣接することから、事業者である株式会社工務店と協議を行い、事業者の任意協力により試掘調査を実施することになった。

3本のトレーナー調査の結果、調査地南側中央から北東隅にかけて、弥生～古墳時代の大型溝を確認した。また、調査地南東側において、近代頃の粘土採掘跡も確認している。その他は、耕作土直下で地山が検出され、埋蔵文化財は確認されなかつた。

6.まとめ

対象範囲のうち、ほぼ全城が埋蔵文化財包蔵地であつたことから、再度協議を行つた。その結果、建物建設範囲のうち遺構が存在する約490m<sup>2</sup>を発掘調査することとなり、平成18年11月に調査し、記録保存を行い終了した。調査結果の詳細については、平成19年8月に刊行予定の報告書を参照されたい。  
(川畠)



第5図 日暮・松林遺跡調査地位置図

はやしちょう かめ の まち ちく  
林町亀ノ町地区

1. 調査地 高松市林町
2. 調査期間 平成18年6月1日
3. 調査担当者 川畠聰, 中西克也
4. 調査の原因 事務所建設
5. 調査の概要

調査地は空港跡地遺跡の近接地であることから、事業者である㈱ジョーンズドキュメンツと協議を行い、事業者の任意協力により試掘調査を実施することになった。

調査地のうち事務所が建つ北半分において、事務所四辺に沿ってトレンチを設定した。その結果、地表より約20~30cm下で、弥生後期の柱穴1基、南北にのびる近世の溝1条、東西にのびる近代の溝1条を検出した。柱穴からは、弥生土器細片が出土した。

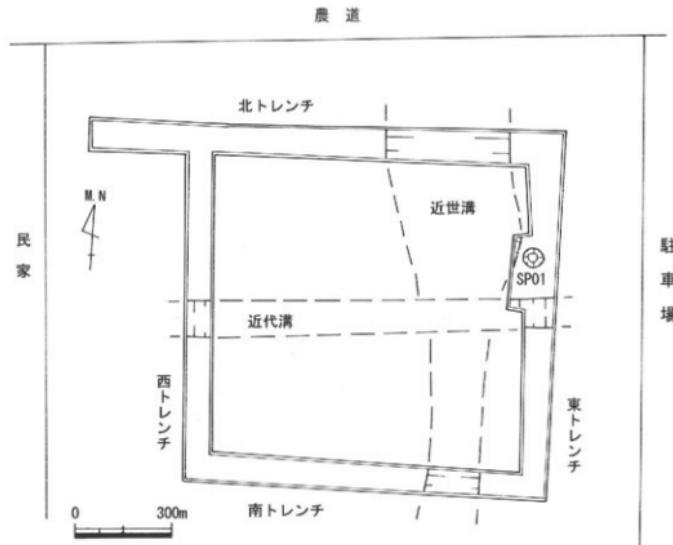
#### 6.まとめ

調査地は、遺構が希薄であるため、埋蔵文化財包蔵地ではないと判断される。唯一確認された柱穴についても、今回で記録保存が終了したことから、事前の保護措置は必要ないものと考えられる。

(川畠)



第6図 林町亀ノ町地区調査地位置図



第7図 林町亀ノ町地区 調査地平面図（縮尺1/150）

ひらお ごうふん  
平尾 1号墳

1. 調査地 高松市前田西町
2. 調査期間 平成18年7月3日～14日
3. 調査担当者 川畑聰、西澤昌平
4. 調査の原因 自然崩壊
5. 調査の概要

a. 調査に至る経緯と経過

平尾1号墳は、胴張りの横穴式石室が開口していることで知られているが、平成16年の台風により玄室入口部が崩壊し、さらに崩壊が進行していることが平成18年6月の巡回で確認された。そこで、土地所有者と協議を行い、石室崩壊前に範囲および内容を確認する調査を実施することで合意した。調査の内容は、石室実測および墳丘測量等である。調査終了後は、崩壊防止および安全対策として、石室入口を土嚢袋で密閉した。なお、調査中に徳島文理大学大久保徹也助教授の指導を受けた。(川畑)

b. 立地

高松市と三木町にまたがる立石山(272.5m)から西に延びる丘陵(通称前田山)は、高松市と三木町の境のテレビ塔から支脈を南に延ばし、幅広の尾根(平尾山)を形成している。平尾1号墳はこの尾根の西斜面に立地する。尾根の西端で最も張り出した地点であり、次に報告する金石2号墳が立地する谷の入口部分であるともいえる。石室は傾斜に合わせて西に開口し、主軸はほぼ東西方向である。

付近に所在する古墳を見ると、尾根の縁辺を固むように潮満塚古墳や山本古墳が存在し、いずれも標高40m前後の尾根の傾斜が変わり、なだらかになる位置を選んで立地している。現在も丘陵斜面の果樹園と平野部の水田域の境に当たる。周辺の水田との比高差は20m弱で、眺望はよい。また、それぞれの古墳は300m前後の間隔をあけて立地しており、1～数基の群を構成するようである。

c. 墳丘

墳丘西側はすぐ近くまで民家が迫って崖となっており、墳丘東側は水路によって墳丘が切られている。これらにより墳丘は大きく改変され、残存する部分は約1/3に過ぎないが、南側に残された水路と崖に挟まれたおよそ1mの範囲に傾斜の変換が認められ、これを墳裾と判断した。この墳裾を石室の中心点で反転すると、墳丘北側のコンターラインがわずかにくびれる部分に対応し、このくびれも墳裾と考えられる。以上より平尾1号墳は直径約13mの円墳に復元できる。墳丘最高点は標高43.60m、墳裾は南側で標高42.25mであるが、石室前面の排水溝の上面は標高40mである。斜面に造られているため見る位置によって墳丘高が変わり、墳丘前面から見た墳丘高は約3.6mとなる。

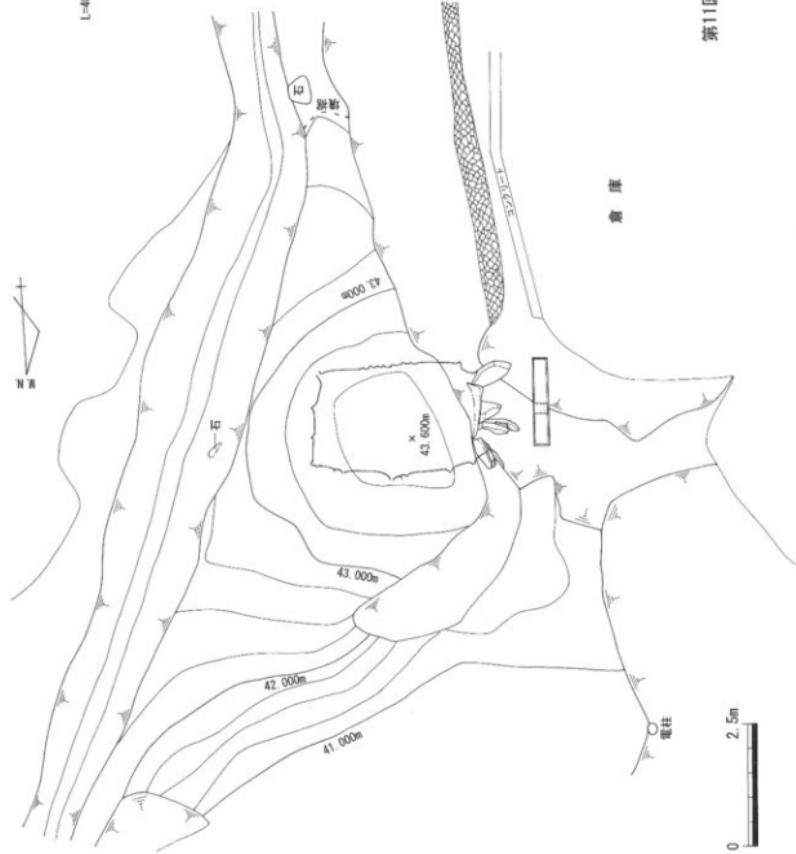
d. 横穴式石室

平尾1号墳は古くから開口しており、渓道と玄門部分が消滅していた。一方、前述のとおり玄門側の左側壁が新たに崩壊していた。右側壁の最も玄門側の石材は縦方向の稜線が揃って通っており、これに合わせて袖石を設置したと考えられる。このことから、この稜線までを玄室の範囲と判断でき、玄室空間はほぼ残っていたことが確認された。玄室平面プランは奥壁から玄門にかけて一旦広がったのち、強く窄まる胴張り形を呈する。また、右側壁4段目の玄門から2石目には2ヶ所の線刻画が見られる。そのほか、後世に倉庫として用いられていたため、整体の石材の隙間に壁土が充填され補強されていた。石室の石材は一部風化や変成作用を受けたものが見られるがすべて安山岩である。

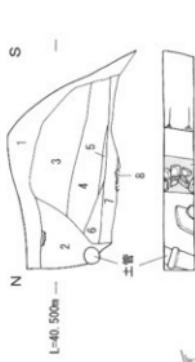
床面調査 崩壊した石材は石室内側の流入土の上に倒れこんでおり、床面調査は奥壁から170cmの



第8図 平尾1号墳調査地位置図



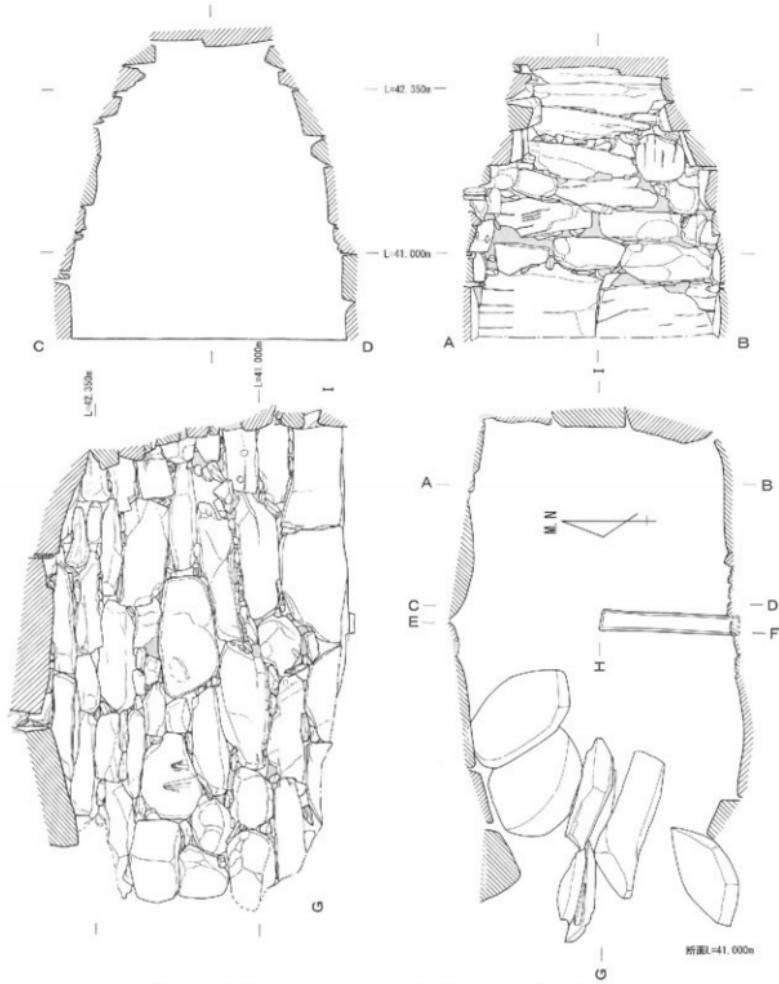
第9図 平尾1号填埋丘測量図（縮尺1/100）



第10図 美道部トレニチ平面図  
・土層断面図（縮尺1/40）



第11図 美道部トレニチ出土遺物（縮尺1/100）



第12図 平尾1号墳石室実測図・土層断面図（縮尺1/40）

範囲のうち南側から行った。上層の流入土を除去するとすぐに、しまりのある黄褐色土が現れ、床面と判断された。次に、調査範囲の北側においても黄褐色土を検出した。また、床面下部の遺構を確認するために、調査範囲の東壁南側を主軸と直交する幅15cmのトレンチを奥壁から170cmの位置に設定し断ち割ったが、黄褐色土が続いていること、床石、排水溝などは認められなかった。遺物は上層から後世の土器片が少量出土したのみであった。床面レベルは約40.3mである。

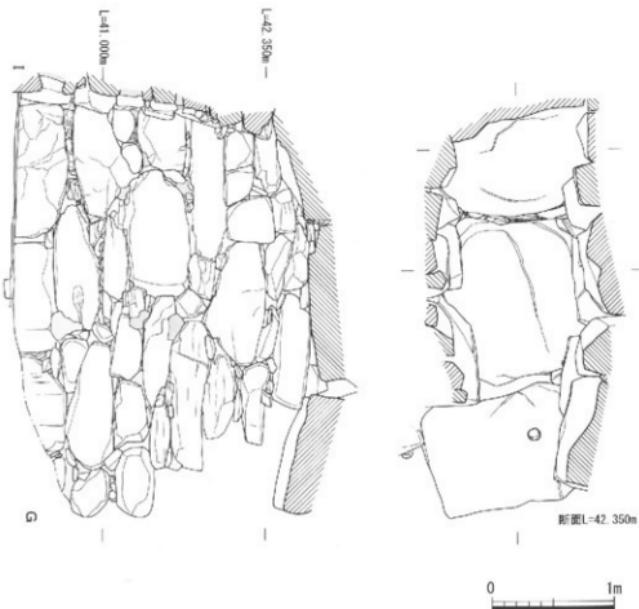
**石室規模** 玄室長は3.69m、奥壁幅1.92m、推定玄門幅1.4mを測る。奥壁から1.7mの地点で幅が2.28mと最大になる。高さは奥壁で2.1m、奥壁から2.2mの所で最も高くなり2.5mである。以上の数値から概



1 流入土 オリーブ褐色細砂 (2.5Y4/3) 粘性。しまりは無く10~20cmの小礫をまれに含む。

2 石室床面 にぶい黄褐色細砂 (10YRS/4) 粘性。しまりがあり、5cm以下の小礫を含む。

※横抜けは後世の壁土



算すると、石室の床面積はおよそ7.23m<sup>2</sup>となる。

**石室構造** 玄室基底石は奥壁とも4石である。壁体は主に長さ0.7~1m、厚さ0.3~0.5mの石材を用いており、天井に近づくにしたがい持ち送りが顕著となる。横目地が奥壁側から玄門側へわずかに下降するように通り、この目地を1回の作業単位とすると各壁とも7段に積まれている。下段から上段になるほど奥壁側の石材の長さを減じ、これによって上下段の石の継ぎ目をずらし、荷重の分散が意識された石材配置となっている。また、最上段（7段目）は石室中央の天井石を高く架構するための部分的なもので奥壁とは接していない。

奥壁の基底石は2石からなり、側壁と同様に7段に積まれている。ただし、奥壁の2段目3段目と側壁の2段目が対応しており、作業単位としては6段であったと思われる。石材は長さ0.7~1m、厚

さ0.2m前後のものを主体とし、2～3石を用いて目地を造りて積んでいる。最上段は持ち送りのため幅が狭くなり、1石である。奥壁と側壁の石材は噛み合わせることなく角を合わせて積んでいる。右側壁玄門側の棟の揃い方から、袖石についても同様であったようである。

天井は3石で構成され、中央を最も高く、他の2石を奥壁側と玄門側に向けてそれぞれ下するようになつて架構している。

**玄門構造** 平尾1号墳の玄門構造は失われており不明である。しかし、側壁の石積みからある程度推測は可能である。香川県内の横穴式石室を概観すると、ほとんどが漢道天井と同じレベルで側壁と奥壁を通る目地が観察でき、さらにその口地を境に持ち送りが顕著になっている。平尾1号墳の壁体を観察すると右側壁では、側壁4段目と5段目の境の目地がほかの目地に比べて直線的であることがわかる。この目地は奥壁の4段目と5段目の境に対応し、右室断面図と合わせてみるとこの目地から持ち送りが顕著になっている。以上により、平尾1号墳の漢道の天井はこの目地が玄門を通る標高42.1m付近にあつたものと推測できる。漢道高は約1.9mになる。

**漢道調査** 石室の前面（奥壁から4.62m）において漢道の基底石の残存状況を確認するために、主軸に直交した幅約25cmのトレンチを南西側の崖に向けて設定した。60cmほど掘り下げたところで北側に土管を、さらに25cmほど掘り下げたところでトレンチ中央に礫群を検出した。1層は表土、2層は土管の埋土、3～6層は後世の堆積土であり、4層には近世の土器片を含む。7層からは須恵器の破片が出土し、古墳時代の堆積の可能性がある。礫群は東西に並び、石室主軸にそろうため、古墳に伴う排水溝と判断できる。土管は近年に倉庫用の配水管として設置されたものと推測できる。漢道の基底石は、北側は土管、南側は崖となっており残っていなかった。

#### e. 線刻画

前述したように、右側壁玄門側に線刻画が認められた。風化し、消えている部分もあるが、頂点から弧線を左右に相対させて合流、分岐しながら垂下させている。左が縦27cm×横13.5cmの範囲に5本、右が縦11cm×横11.5cmの範囲に8本で描かれている。このような傘形の線刻画の類例として、善通寺市、坂出市に見られる家屋文が挙げられる。ただし、頂点を結束させる表現と地面を表す横線が見られない点が異なっている。東讃地域での線刻画の発見は本例が初めてである。

#### f. 出土遺物

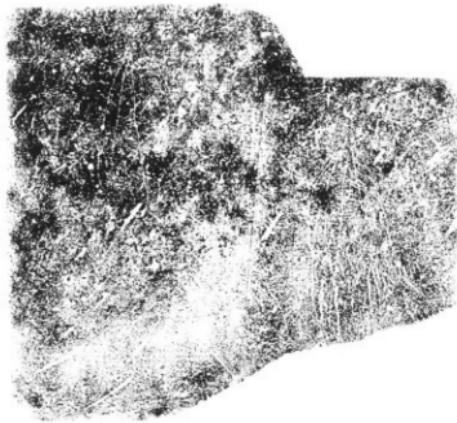
図化可能な遺物は、漢道調査トレント7層から出土した須恵器1点である。

第11図は漢道調査トレントから出土した須恵器の一部である。小片のため壺蓋、壺身の判断、径、傾きなど不確実である。調整は外面に回転ヘラ削り、内面に指ナデが施されている。時期の認定は困難だが、TK209型式以前である。

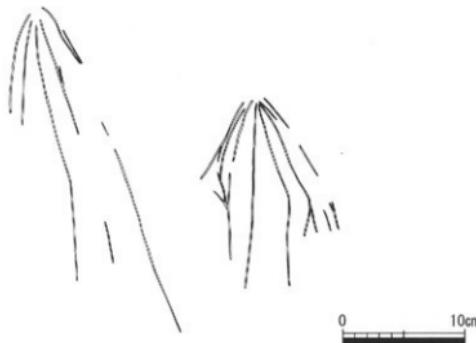
#### 6.まとめ

平尾1号墳は漢道の形状は不明であるものの、胴張りの玄室と漢道に排水溝を持つ横穴式石室墳である。当墳の石室面積(7.23m<sup>2</sup>)は、高松平野では大型石室（註1）に次ぐ規模であり、周辺の古墳と比較すると潮満塚古墳に次いで第2位の規模である。周辺の古墳と石室構造を比較すると、平尾1号墳は奥壁に鏡石を持たず6～7段に積まれているが、金石2号墳は大型の石材で3段に積まれ、山本古墳は鏡石を用いさらに2段積み上げている。潮満塚古墳は、石室の半分以上が埋まっているため正確な判断はできないが、鏡石と思われる石材の上部がわずかに確認でき、その上に2～3段を積むようである。古墳の規模の違いもあり一概に言うことはできないが、平尾1号墳→潮満塚古墳・金石2号墳→山本古墳という順序が考えられる。側壁に用いられた石材についても同様の順序で大型化しているようである。鏡石を持つ古墳はTK43型式以降に出現するため、潮満塚古墳以降はこの時期と考えられる。以上の検討と漢道出土の須恵器から、平尾1号墳の時期は6世紀後半でも古い時期と考えられる。高松平野では大型石室墳はほぼTK209型式以降の築造とされ、同時期の古墳が少ないが、比較すると大型の石室を持つ有力墳と評価できる。また、東讃地域で唯一の線刻画をもつ古墳であることも、特筆される。（西澤）

（註1）石室面積9m<sup>2</sup>以上を大型石室とした。



第13図 平尾1号墳 線刻画拓本（縮尺1/4）



第14図 平尾1号墳 線刻画実測図（縮尺1/4）



写真1 平尾1号墳 線刻画



写真2 平尾1号墳 遠景



写真3 平尾1号墳 墓丘および  
石室封鎖状況(西から)



写真4 平尾1号墳  
墓丘背面（北東から）

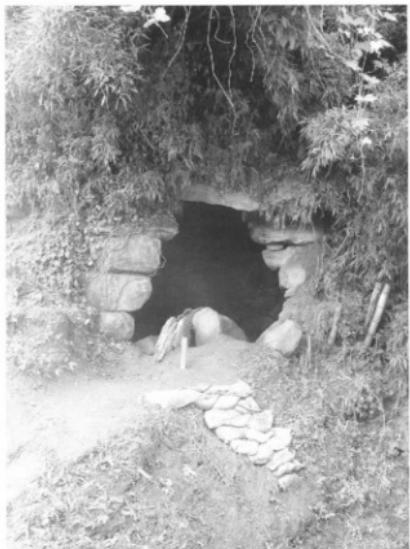


写真5 平尾1号墳 石室 前面



写真6 平尾1号墳 石室 奥壁



写真7 平尾1号墳 石室 右側壁(入口から)



写真8 平尾1号墳 石室 左側壁(入口から)



写真9 平尾1号墳 石室 左側壁(奥壁から)



写真10 平尾1号墳 石室 右側壁(奥壁から)



写真11 平尾1号墳 石室 天井(奥壁から)

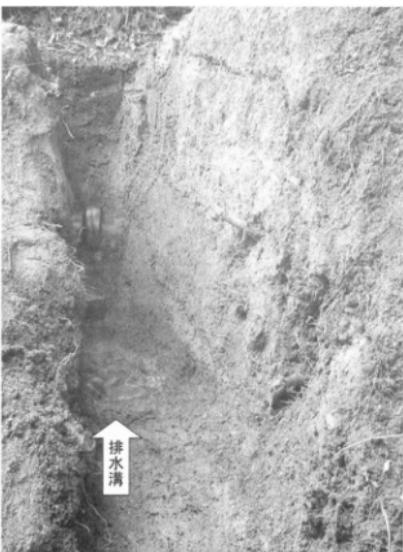


写真12 平尾1号墳 瑞道部分トレンチ(南から)

にししたいせき  
西下遺跡

- 調査地 高松市十川西町
- 調査期間 平成18年7月28日
- 調査担当者 山元敏裕、中西克也
- 調査の原因 校舎増築
- 調査の概要

十河小学校に隣接して推定南海道が存在することから、事業主体である高松市教育委員会総務課と協議を行い、試掘調査を実施することになった。

増築予定地は校地東端にあたり、既設建築物や埋設管等により限られた部分の調査であったが、南北方向のトレンチを2本設定した。第1トレンチでは、地表から約55~95cmにおいて遺構面を検出するとともに、南から北に地形が傾斜していることが判明した。確認した遺構は柱穴5基および不定形土坑1基であり、柱穴は直線状に並んでいることから掘立柱建物跡を構成する可能性がある。これら遺構は、出土した遺物から、奈良時代および室町時代のものと考えられる。なお、第2トレンチは、花崗土除去後すぐに埋設管があったことから、それ以上の掘削ができなかった。

6.まとめ

限られた部分の試掘調査であったが、対象範囲全域が埋蔵文化財包蔵地である可能性が指摘できる。そのため、発掘調査を平成19年度に実施する予定である。(山元)

たひしもまちげしょいせき  
多肥下町下所遺跡

- 調査地 高松市多肥下町
- 調査期間 平成18年8月16日
- 調査担当者 川畠聰、中西克也
- 調査の原因 消防署建設
- 調査の概要

消防署建設予定地周辺に凹原遺跡が存在することから、事業主体である高松市消防局と協議を行い、試掘調査を実施することになった。

建物建設予定の北・西・南辺に沿ってトレンチを設定した。機械掘削の結果、地表から深さ約80~90cmで地山に達し、遺構を確認した。遺構の種類は、条里型の溝2条(SD02・03)、斜め方向の溝2条(SD01・04)、柱穴1基(SP01)、不明遺構(SX01)、土坑1基(SK01)である。これら遺構は、黒褐色シルト質極細砂の埋土をもつが、遺物は皆無であり、所属時期の特定には至らなかった。また、土坑については、他と埋土が違い、遺構か否かは疑問の余地がある。



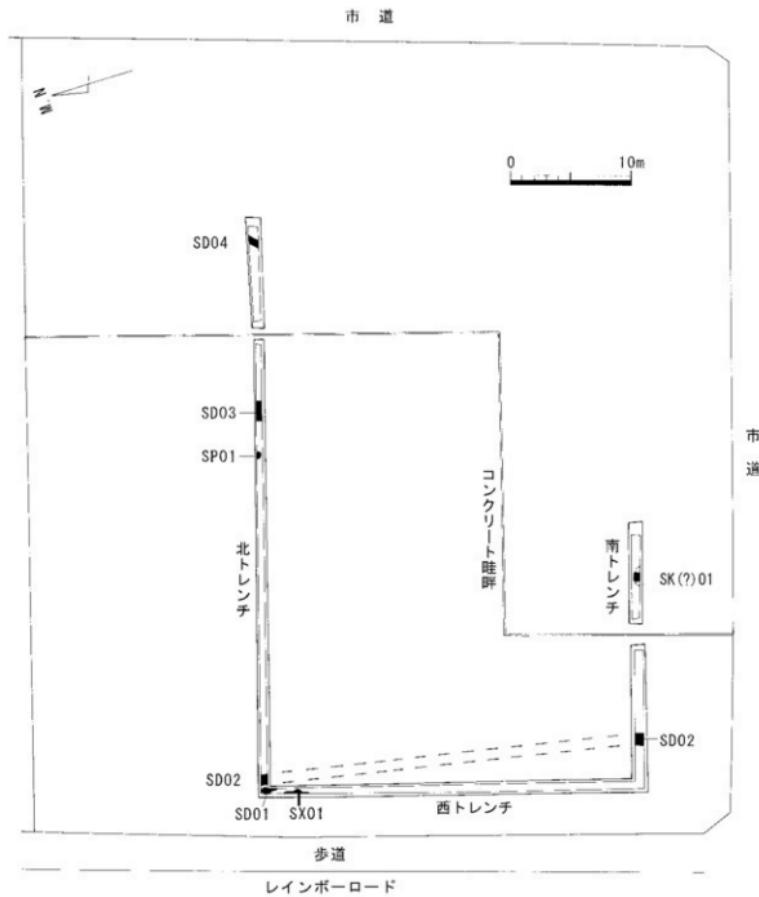
第15図 西下遺跡調査地位置図



第16図 多肥下町下所遺跡調査地位置図

## 6.まとめ

当該地は、遺構が存在することから、埋蔵文化財包蔵地として取り扱うことが可能である。ただし、出土遺物が無く、遺構の所属時期が特定できないため、重要度は低いと考えられる。平成19年度に建設工事を予定しており、その際には工事立会等の措置が必要と考えられる。（川畑）



第17図 多肥下町下所遺跡 調査地平面図（縮尺1/400）

## かないし ごうふん 金石 2号墳

1. 調査地 高松市前田西町（私有地）
2. 調査期間 平成18年8月21日～30日
3. 調査担当者 大久保徹也、川畑聰、西澤昌平
4. 調査の原因 内容確認
5. 調査の概要

### a. 調査に至る経緯と経過

前田地区には多数の古墳が分布しているが、どれもが未調査であった。そのため、前述の平尾1号墳の調査を契機として、今回の調査は金石2号墳の範囲および内容を確認することを目的としている。調査の方法は、石室実測および墳丘測量等である。

なお、今回の調査は、徳島文理大学大久保徹也助教授の協力により、専攻生6名の参加による考古学実習を兼ねるものであった。さらに、大久保助教授からは、本原稿のうち墳丘部分について玉稿をいただいた。また、立命館大学専攻生1名のボランティア参加もあった。（川畑）

### b. 立地

高松市と三木町にまたがる立石山（272.5m）から西に延びる丘陵（通称前田山）は、高松市と三木町の境のテレビ塔から支脈を南に延ばし、幅広の尾根（平尾山）を形成している。金石2号墳は平尾山とその西側の尾根（金石山）に挟まれた谷の中腹斜面に位置し、山腹が西方に緩く張り出した緩斜面を利用して築かれた小型円墳である。墳丘北側は西に開く比較的深い谷に面している。墳丘の背面は比較的幅広く削られた溝によって山腹から墳丘を切り離している。（西澤）

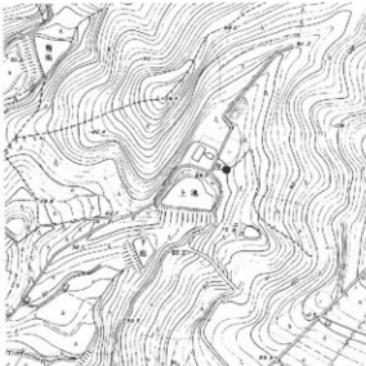
### c. 墳丘（第19図）

金石2号墳の円丘最高所は標高74.8mを測る。裾まわりは近現代の開墾により2～3段の狭い平場に改造され、旧状をやや損なうが、全体として墳丘の形状は保存されているといえよう。石室玄門部の天井石を除去した際の掘り込みによって墳丘前面の等高線がやや乱れる他、北西斜面が多少直線的にもみえるが、地形的制約などを考慮すれば石室主軸方向（南西→北東）にやや間延びした略円形の墳丘が想定できる。墳丘前面、標高72.5m前後に廻る畠地造成時の小カット面は、位置などから本来の墳壙を反映するものとみられる。この推測に従えば、前面から見た墳丘高は約2.3mとなる。地形勾配に沿う形で背面に向って墳壙レベルは上がるようだ。また墳丘径は北西→南東方向で約10m、北東→南西方向（石室主軸方向）で約11mと推測される。墳丘背面には溝（掘り割り）を反映する、現状で最大幅約8mを測る帯状の凹地がめぐる。この部分も畠地に造成されており多少の改変を蒙るとみられるが、墳丘背面に設けられたほとんど墳丘径に匹敵する規模の大きな掘り割りの形状をよくとどめている。なお周辺の地形から推測してこの溝（掘り割り）は墳丘前面までは及ばないものと思われる。また段築・葺石といった墳丘外表装飾を伴う形跡は全く認められない。（大久保）

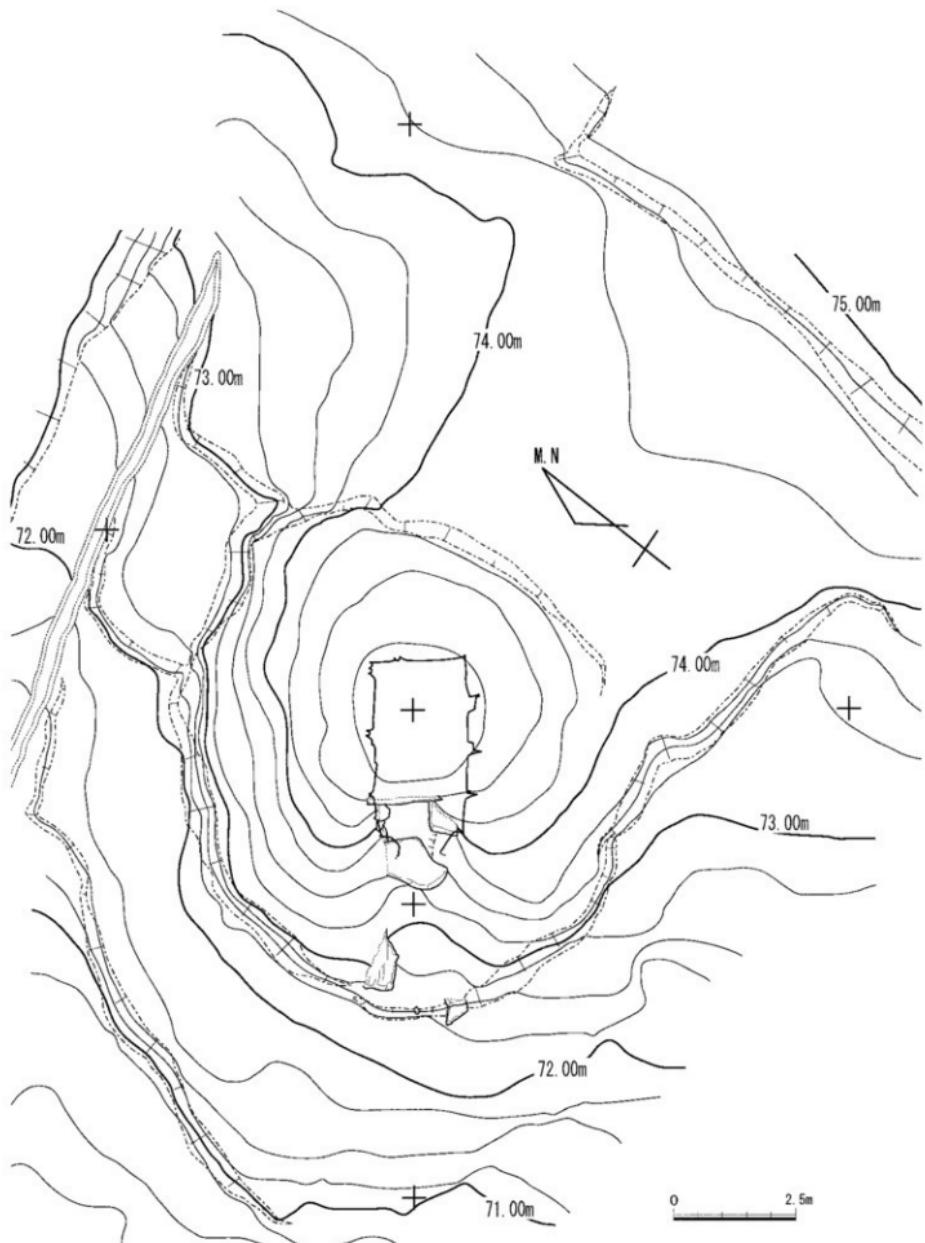
### d. 横穴式石室（第21図）

金石2号墳は古くから前壁部分の石材が移動され開口していたようである。玄室は墳丘のほぼ中心に設置している。玄室平面プランは、奥壁から玄門手前までがほぼ同じ幅で、玄門近くで急に窄まる羽子板形である。羨道部分は埋没しているが、天井石1石が架かる。なお、石室の石材はすべて安山岩である。

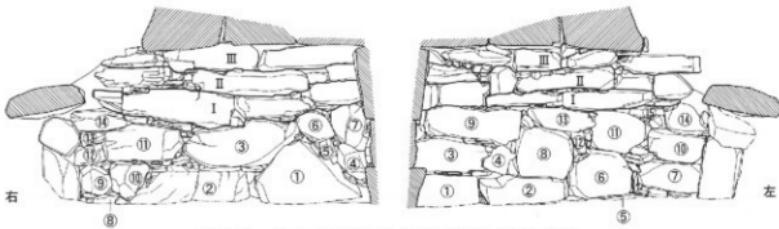
**床面調査** 床面調査は奥壁際と奥壁から1mの両側壁際間に幅10cmほどのトレンチを設けて行った。



第18図 金石2号墳調査地位置図



第19図 金石2号墳 填丘測量図（縮尺1/100）



第20図 金石2号墳石室構築工程図（縮尺1/60）

石室内の水はけが悪いためか、上層はわずかにグライ化しており、その下にやや明るい土が堆積していた。10cmほど掘り下げたところで奥壁際では礫が、両側壁では硬くしまった面が現れたため、これを床面と判断した。床面レベルは約72.1mである。墳丘前面の墳裾レベルは72.25～72.5mであり、羨道部分の埋没やわずかな傾斜を想定すると違和感の無いレベルである。また、墳丘背面と比較すると3m前後の比高差があり、尾根をL字にカットした墓壙が掘削されたと想定される。

**石室規模** 玄室長は3.58m、奥壁幅1.93m、玄門幅1.69mを測る。高さは奥壁で2.05mである。以上の数値から概算すると、石室の床面積はおよそ6.68m<sup>2</sup>となる。羨道は玄門部分で幅0.86m、高さ1.3mを測る。長さは未調査のため不明である。墳丘前面の石積みを含めると全長は7.47mを測る。

**石室構造（第20図）** 奥壁は、基底石に2石が用いられ3段に積まれている。1段目は高さ約50cmの石材を2石使用しているが、2段目、3段目はそれぞれ約60cm、約80cmの石材1石を用いており、上段になるほど大きな石材を用いている点が特徴的である。

側壁の構造は、奥壁2段目から羨道天井を通る横目地によって二つの作業単位に分かれている。下部は2段から3段をほぼ垂直に積み上げており、上部は3段を持ち送って積んでいる。また、最も玄門寄りの箇所では天井からの荷重を袖石にかけるため、最下部から持ち送っている。

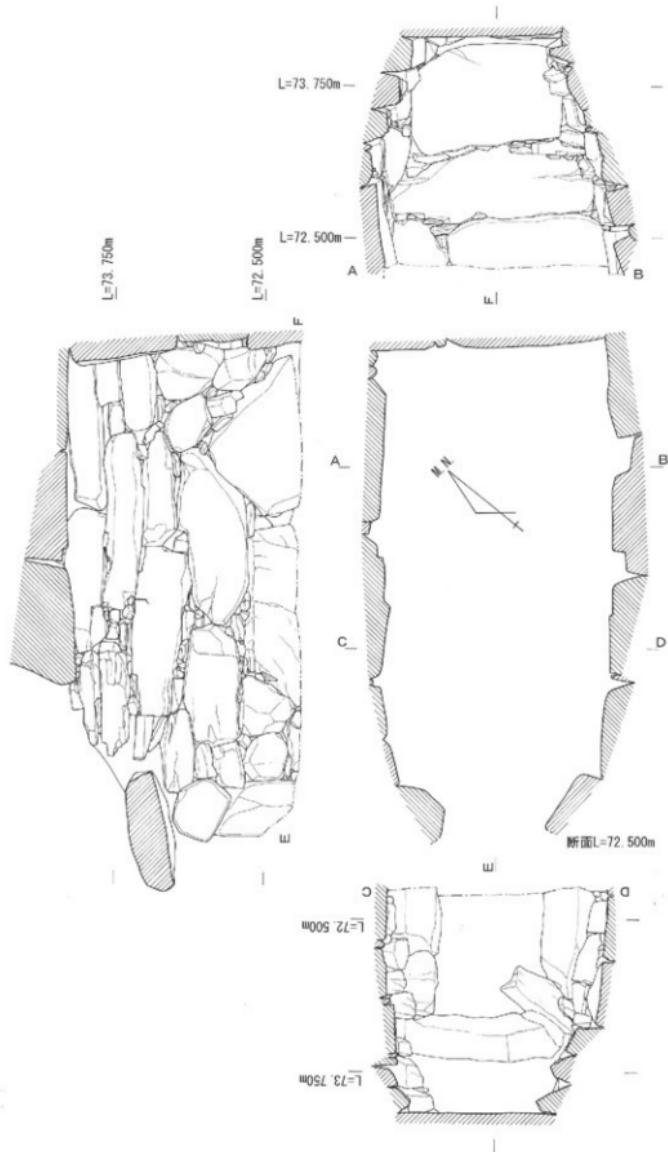
下部は左右で使用石材が対応しておらず、積み方も若干異なっている。左側壁では、まず奥壁側に①～④を積み、次に羨道側に基底石⑤を設置したのち、その上に⑥を置き、袖石との間に⑦、そして奥壁側に⑧、⑨を積む。次に、⑦の上に立柱石の高さに合わせて⑩を据え、そこから奥壁側へ向けて⑪、⑫、⑬の順に積んでゆく。最後に⑭、⑮を積み上げる。使用している石材は厚さ40cm前後の板状石材（①、②、③、⑦、⑨）と50×70cm前後の四角い石材（⑥、⑧、⑪）である。

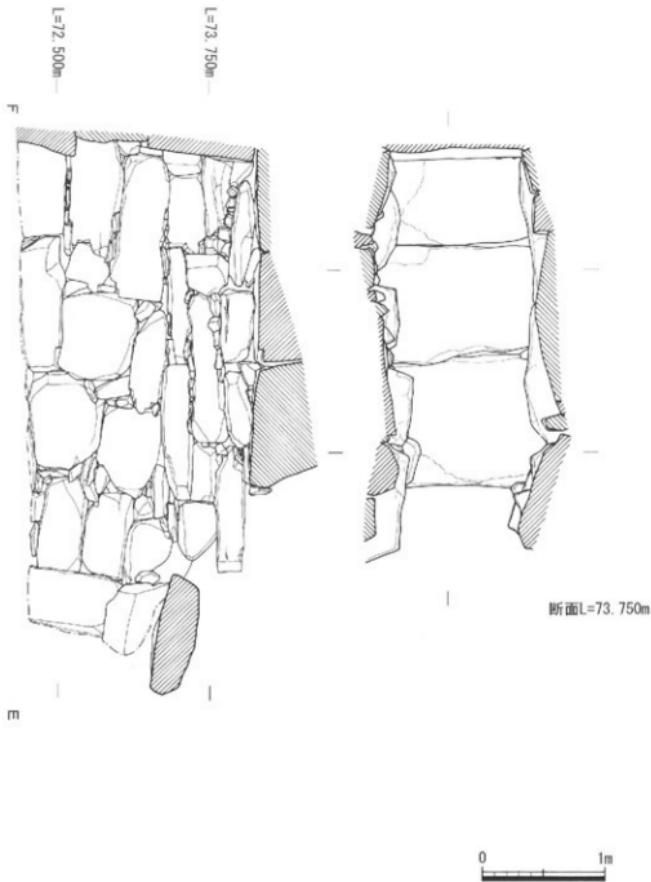
右側壁では、①、②、③の3石を台形に据え、この台形と奥壁の間を埋めるように④、⑤、⑥そして⑦を積んでいる。玄門側では、まず⑧を据え、その上に⑨を立柱石に荷重がかかるように設置し、⑨と②の間に⑩を落とし込む。次に⑩の上に⑪を積み、立柱石と⑪の間に⑫を設置し、その上に⑬を積む。最後に⑭を置く。使用している石材は①の三角形の大型のもののほか、厚さ50cm前後の大型の板状石材（②、③、⑬）、直径が30～50cm大の栗石状石材を使用している。

上部の構築は両壁ともに共通してI、II、IIIの3段に積まれている。使用石材は厚さ20～40cmの板状の石材が中心である。両側壁の積み方の共通点は、上部の構築法、斜め方向の目地を意識して袖石に荷重をかけて積んでいる点と、右側壁の⑪、左側壁の⑭など袖石の高さに合わせた作業単位が見られる点である。

玄門の袖石は、幅50cm、高さ70cm前後の立柱石の上に50cm大の栗石状の石材を積んだ2段構成である。羨道天井石は開口時にずれた可能性があり、左袖上段は迫り出している。

天井は現状では3石が残っている。本来は4石あったと考えられ、開口時に移動したと思われる扁平で大型の石材が墳丘前面に残されている。天井高は奥壁側が最も高く、わずかに玄門側に向けて高さを減じている。石室は前壁部分から開口しているため、天井と前壁の関係は不明である。その構造を側壁から推測すると、天井は玄門に向けて下降し羨道天井石に接するとは考えられず、ほぼ水平に天井が続き、羨道天井石の上にもう1段石材を積んだ前壁2段の構造であったと考えられる。





第21図 金石2号填石室実測図（縮尺1/40）

側壁下部の積み方の違いは、築造順序にある可能性が考えられる。整った石積みの左側壁と比べて右側壁は辻接を合わせたような積み方である。奥壁基底部も左側壁に合わせて幅広の石材を設置しており、下部の石積みは左側壁→奥壁・袖石→右側壁の築造順が想定できる。

奥壁と側壁の石材は噛み合せることなく角を合わせて積んでいるが、奥壁の2段目と3段目の境には左側壁に渡し架けた石材（刃石）を用いている。

**羨道構造** 石室前面裾部左側には石積みが露出している。位置関係からは墳丘裾の外護列石と考えることも不可能ではないが、周辺に連続する配石も見られないため、そのような想定は困難であろう。現状から判断する限り、羨道の延長方向に位置し、羨道に関わる石積みであると考えられる。羨道は天井石1石が残り、玄門部分では高さ約1.2mを測る。ただし、この天井の架構された「羨道」という構造が墳丘前面まで延びることは考えられず、羨道側壁の延長を墳丘斜面に沿って下降して斜めに積まれた、部分的な石積み擁壁構造（註1）と想定できる。擁壁長は、羨道の天井石が1石のみであったと考えれば約2.8mである。しかし、高松平野で羨道の天井石が確実に残る古墳を見ると2石を架構するものが多く、それらの古墳は金石2号墳に比べると擁壁長も短い。本来は羨道の天井石は2石であり、そのことに伴って短い擁壁が取り付くという可能性が想定できよう。以上の想定は羨道部分が未調査であるため今後の課題としたい。

#### 6.まとめ

金石2号墳は羽子板形の平面プランを持つ両袖型横穴式石室を主体部とする径11mの円墳である。

遺物から時期を特定することができないため、石室構造から検討を行う。金石2号墳の石室の特徴を挙げると、1. 3段構成の奥壁、2. 前壁は2段構成（推定）という2点である。まず、3段構成の奥壁については、鏡石を用いていないという点で古相に位置づけることが可能であり、周辺の古墳との比較でも平尾1号墳の次の段階と考えられる。しかし、前述したように上段に大型の石材を用いるという特異な構造のため、詳細な時期を判断することはできない。次に、前壁が2段構成という特徴について考察を加えると、少ない県内の類例の中でも、久本古墳、山下古墳といった大型墳、石清水尾山5号墳や磐原正原古墳といった小型古墳が挙げられる。これらの古墳はおおむねTK209型式までの築造と考えられ、当該墳の特徴もTK209型式以前のものと考えられる。以上の検討から、金石2号墳はおおむねTK209型式段階と判断できる。

石室面積（6.68m<sup>2</sup>）は高松平野では中規模にあたり、周辺の古墳と比較すると平尾1号墳に次ぐ規模である。平尾1号墳と比較すると、奥壁幅や長さに大きな差は見られないが、平面プランと天井構造が異なっており、平尾1号墳には金石2号墳より玄室空間を広く取ろうとした作意が見られる。墳丘規模は塩満塚古墳（15m）、平尾1号墳（13m）、金石2号墳（11m）の順であり、石室規模と対応している。時期的には平尾1号墳の次の段階に塩満塚古墳と金石2号墳が造られ、古墳の規模を勢力の強弱としてみると、小地域の中でも階層差があるようである。

金石2号墳の調査によって前田地城の古墳の基礎データを平尾1号墳に統いて得ることができた。今後、上位階層の古墳と想定される塩満塚古墳や下位階層の古墳群と想定される平尾小古墳群の調査が待たれるところである。（西澤）

（註1）「羨道」を天井の架かる部分、墓道を墳丘外から石室に至る通路部分と理解すると、この部分の名称を羨道の側壁とも羨道の側壁とも表現できない。本文ではこれらと異なる構造であることを明確にするため「擁壁」と表記する。



写真13 金石2号墳 遠景  
(南から)



写真14 金石2号墳 近景  
(南から)



写真15 金石2号墳 遠景  
(北西から)



写真16 金石2号墳 玄室奥壁  
(玄門から)



写真17 金石2号墳 玄室玄門  
(奥壁から)



写真18 金石2号墳 玄室天井  
(玄門から)



写真19 金石2号墳 玄室 右側壁(玄門から)



写真20 金石2号墳 玄室 左側壁(玄門から)



写真21 金石2号墳 玄室 左側壁(奥壁から)



写真22 金石2号墳 玄室 右側壁(奥壁から)

おか やましよう こ ふんぐん ごう ふん  
岡山小古墳群11号墳

1. 調査地 高松市新田町
2. 調査期間 平成17年10月2・3日
3. 調査担当者 川畑聰, 中西克也, 西澤昌平
4. 調査の原因 病棟新築
5. 調査の概要

工事対象地が、岡山小古墳群のうち11号墳の南に隣接することから、事業者である高松東病院と協議を行い、事業者の任意協力により試掘調査を実施することになった。併せて、詳細が不明である岡山古墳群および岡山小古墳群の分布調査を実施して、包蔵地の範囲内容の確認に努めた。

11号墳の墳丘にかかる形で第1・2トレンチを設定し、そこから東へ約8m離れて第3トレンチを設定し、人力掘削した。墳丘の盛土は明確でなく、確認されたものは近代の水路跡のみで、遺物も出土しなかった。さらに11号墳の墳丘範囲を明確にし、工事による影響を避けるため、墳丘測量を実施した。その結果、南北約9.5m、東西約7.5mの楕円形を呈し、高さ約1mを測る円墳であることが判明した。墳丘中央には盗掘孔が穿たれ、その北側には安山岩の板石が残されていたことから、箱式石棺を主体部にもつ古墳で、板石は蓋石の可能性がある。

分布調査の結果は、遺跡台帳に登録されている古墳、すなわち岡山古墳群では1～5号墳の5基、岡山小古墳群では1～15号墳の15基を確認した。確認した古墳については、位置を地図に記すとともに、略測・写真撮影等を実施した。

#### 6.まとめ

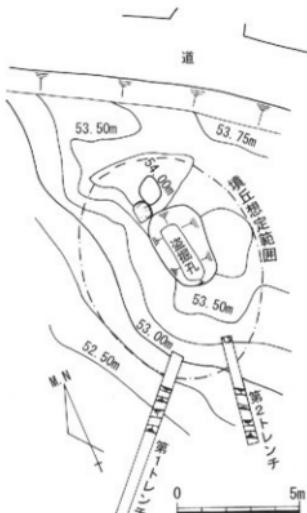
試掘調査を実施した病棟新築予定地は、埋蔵文化財が確認されなかつたことから、事前の保護措置は必要ないと考えられる。

一方、今回分布調査で確認した古墳は、すでに遺跡台帳に登録されている古墳であり、新規の古墳は確認されなかつたが、良好に保存されていた。さらに、現地は雑草・雜木の繁茂が著しく、また土地の改変を受けている箇所もあることから、未知の古墳が存在する可能性もある。

なお、これら古墳群について若干の考察を加えると、岡山古墳群1号墳と岡山小古墳群については、丘陵上部に立地し、墳丘が低く、箱式石棺を主体部にもつものがあることから、古墳時代前期から後期前半までの群集墳の可能性がある。さらに、1号墳は最高所に立地し、前方後円墳の可能性があり、弥生土器片が採集されていることを考慮すると、1号墳の築造を契機として古墳群が形成された可能性もある。一方、かつて古墳群周辺で採集された土器は第24図のとおりである。1・2の土器片が小



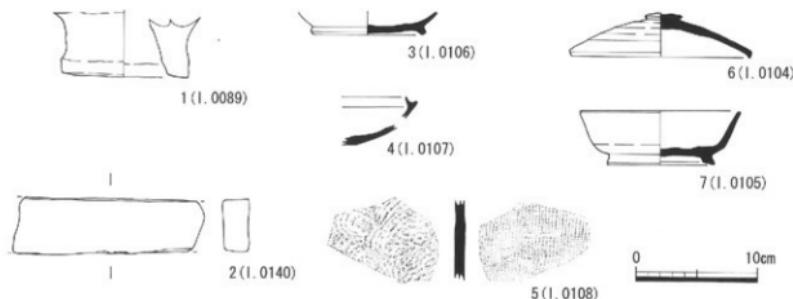
第22図 岡山小古墳群調査地位置図



第23図 11号墳平面図(縮尺1/200)

古墳群の2号墳から、3の須恵器杯が同じく2号墳の東側から出土している。1は上師質の陶棺脚部の可能性があり、3は奈良時代墳のものであり、立地や墳丘などから推測される時代とは齟齬がある。また、山頂にある金刀比羅神社の北側斜面では、4・5の須恵器杯と甕片が採集されており、杯は古墳時代後期でも7世紀中葉のものである。岡山の丘陵が複数の時代にわたって墓地等に使用されている可能性もあることから、岡山小古墳群の年代については、今後の調査によって明らかになるであろう。

さいごに、岡山2～5号墳は、後期末の横穴式石室を主体部とする群集墳であり、使用している石材は大きいが、やや小型の無袖の横穴式石室であることから7世紀中葉の築造時期が考えられる。第24図の6・7の須恵器蓋と杯が、かつて岡山南東斜面から採集されたもので、7世紀末～8世紀前半頃のものである。石室の年代よりやや新しいが、追葬または墓前祭祀や再利用などに伴う遺物の可能性がある。（川畑）



第24図 岡山古墳群および岡山小古墳群 分布図（縮尺1/2,000）

採集遺物実測図（縮尺1/4、高松市歴史資料館所蔵）

※遺物実測図の一部は『高松市歴史資料館収蔵資料目録～考古資料～』1996より転載

古 墳 名	時 代	遺 構	出 土 遺 物
岡山古墳群 1号墳	弥生時代後期末～ 古墳時代前期初頭	前方後円墳? 全長18m, 後円部径8m, 前方部幅6m, 高さ1m未満	(伝)弥生土器片
岡山古墳群 2号墳	古墳時代後期後半	円墳? 無袖式横穴式石室 (石室長4.2m, 幅1.6m)	な し
岡山古墳群 3号墳	古墳時代	円墳 (直径10m×7m) 安山岩塊石が散布している	な し
岡山古墳群 4号墳	古墳時代後期後半	円墳? 横穴式石室 (石室長2m以上)	な し
岡山古墳群 5号墳	古墳時代後期後半	円墳? 横穴式石室 (石室長2.2m以上, 幅1.35m)	な し
岡山小古墳群 1号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径9.5m, 高さ1m未満)	(伝)土師器片
岡山小古墳群 2号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径10m, 高さ1m未満)	な し
岡山小古墳群 3号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径6.7m×3m, 高さ1m未満) 安山岩塊石が露出している	な し
岡山小古墳群 4号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径9.8m, 高さ約1m)	な し
岡山小古墳群 5号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径6.8m, 高さ約1m)	(伝)土師器片
岡山小古墳群 6号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径10m×6m, 高さ1m未満)	な し
岡山小古墳群 7号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径8.5m×7m, 高さ約1m)	な し
岡山小古墳群 8号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径6.1m, 高さ約1m)	な し
岡山小古墳群 9号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径9m×7.5m, 高さ約1m)	な し
岡山小古墳群 10号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径7.5m, 高さ約1m)	な し
岡山小古墳群 11号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径9.5m×7.5m, 高さ約1m) 安山岩板石があり, 箱式石棺の蓋石の可能性がある	な し
岡山小古墳群 12号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径8m×6m, 高さ1m未満)	な し
岡山小古墳群 13号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径7m, 高さ1m未満)	(伝)土師器片
岡山小古墳群 14号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径3.3m, 高さ1m未満)	な し
岡山小古墳群 15号墳	古墳時代前期～ 後期前半	円墳 (直径10m×7m, 高さ1m未満)	(伝)土師器片

第1表 岡山古墳群および岡山小古墳群 一覧表

ひぐらし まつばやし いせき  
日暮・松林遺跡 (事務所建設)

1. 調査地 高松市多肥上町
2. 調査期間 平成18年10月10日～12日
3. 調査担当者 小川賢, 中西克也
4. 調査の原因 事務所建設
5. 調査の概要

a. 調査に至る経緯と経過

調査地は日暮・松林遺跡の隣接地であることから、施工者である㈱穴吹工務店と協議し、事業者の任意協力により試掘調査を実施することになった。試掘調査は、主に建物基礎および合併浄化槽部分においてトレンチを設定した。その結果、弥生時代の遺構・遺物を確認したことから再度協議を行い、今回トレンチを設定した箇所以外は工事において極力掘削せず、遺跡を現状保存しながら工事を実施することで合意した。

b. 調査の内容 (第26図参照)

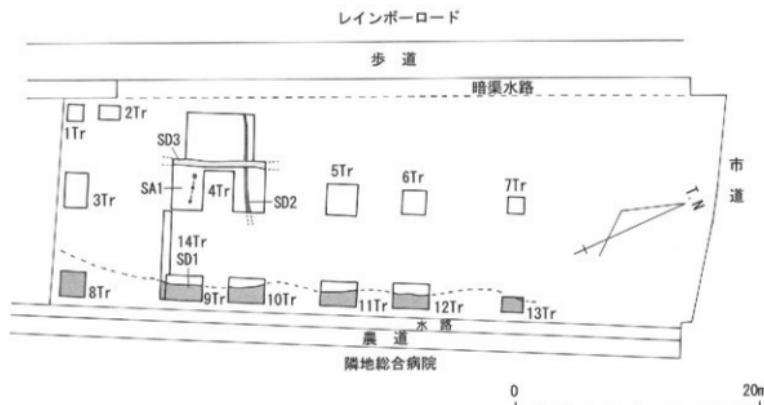
トレンチは施工者から提出された図面をもとに、遺構面まで工事掘削が想定される13箇所と横断面確認のため第14トレンチを設定した。このうち、第4・8～14トレンチで遺構・遺物を確認した。

第8～14トレンチ (第27～29図参照)

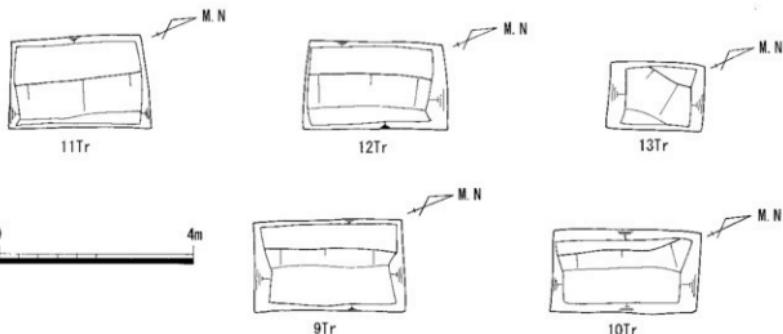
調査地の東端で、北へ伸びる大溝SD1を確認した。地山である黄褐色粘土層が確認面で、溝底までの深度は現地表面から約1.7mを測る。確認できたのは西脇のみだが、第9・10・14トレンチでは底面が見られ、横断面は逆台形を呈することが判明した。このうち第9・14トレンチでは中位に堆積する黒色シルト質粘土層において、河原石に混じり弥生時代中期の土器片が多数見られた。一方、第10トレンチ以北では小片のみで出土量も少量となっている。また第8トレンチについては溝の肩部は確認



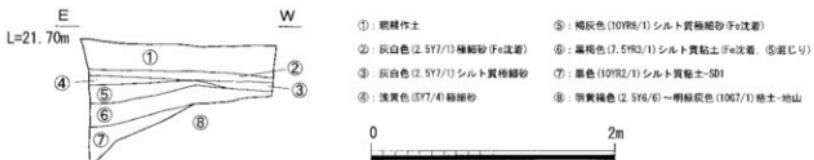
第25図 日暮・松林遺跡調査位置図



第26図 日暮・松林遺跡（事務所建設）トレンチおよび遺構配置図（縮尺1/400）



第27図 日暮・松林遺跡（事務所建設）第9～13トレンチSD 1遺構配置図（縮尺1/100）



第28図 日暮・松林遺跡（事務所建設）第11トレンチ南壁土層図（縮尺1/40）

できず、黒色の粘質土が現地表面から約1.7mの深度まで認められた。出土遺物が弥生時代後期を中心としていることから、第9・14トレンチとは異なった埋没過程が考えられる。

#### 第4トレンチ（第29～31図参照）

調査地の南西部で、溝状遺構SD 2・3、柵列状遺構SA 1を確認した。いずれも削平の影響が大きく、所属時期を示す出土遺物はない。SD 2は黒褐色の堆土をもち東へ下るもので、遺存の良い東端では中位に段が見られる。SD 3はSD 2に後出しし、堆土の特徴では近世以降と想定される。SA 1は根石を据えたものがあり、対面側を確認できなかったが掘立柱建物跡を構成する可能性も考えられる。

#### 第9・14トレンチ出土遺物（第32・33図参照）

1～34はSD 1の出土遺物で、うち10・19は最下層の出土である。それ以外は層位別に詳細な取り上げを行っていないが、出土時の状況から中層を中心とするものと考えられる。剥離などにより土器の加飾等に不詳な点もあるが、若干量の後期の土器（29～31）を除けば、弥生時代中期後半の比較的まとまった土器群となる。32・33は石庖丁で、33は片岩製である。34は細目の砥石である。

#### 第8トレンチ出土遺物（第34図参照）

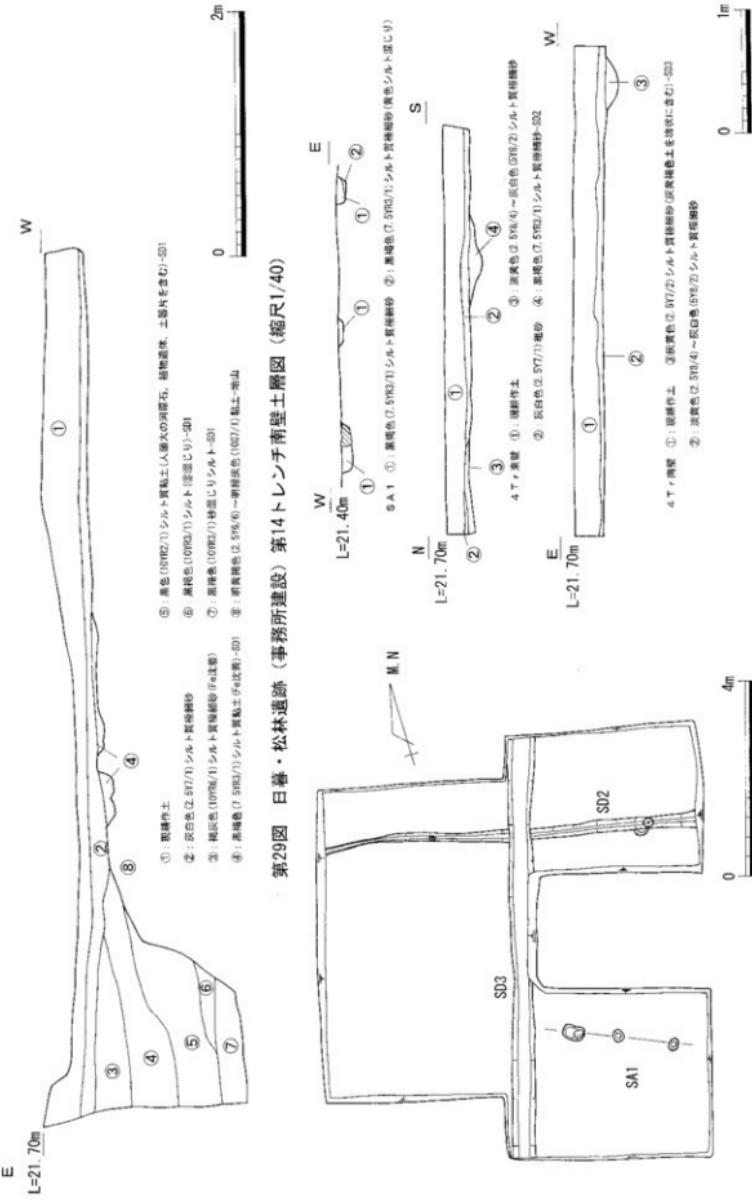
第9・14トレンチと対照的に下川津B類土器（35・39～43）を含めて後期後半のものが大半で、46のように中期に遡るものは少ない。これらの上器片の他に、板材が数点出土している。

#### 第11トレンチ出土遺物（第35図参照）

47はSD 1の出土遺物で、弥生土器鉢。口縁を内外に拡張し、端部に凹線と円形浮文を施す。48・49は、SD 1上面の出土遺物。48は須恵器坏蓋で、8世紀末～9世紀初頭の所産。49は土師器甕である。

#### 6.まとめ

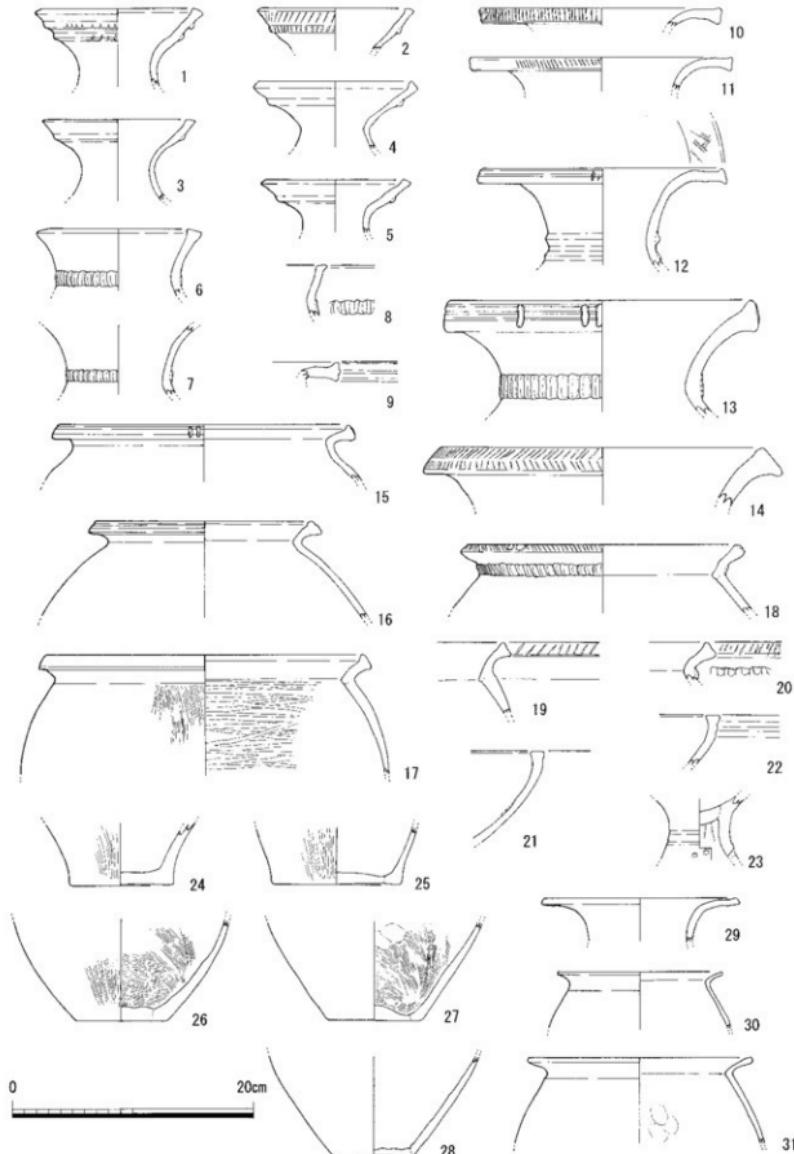
調査地は、桜木神社付近で分岐する旧河道に挟まれた南北方向の微高地中央部に位置し、確認されたSD 1はこれを縦断する位置関係にある。推定される溝の規模や、微高地の頂部に開削されていることから、基幹となる用水路が想定されるが、所属時期が弥生時代中期にまで遡りうるものかどうかについては、今後の調査成果の蓄積等による周辺での土地利用状況の検討が必要と考えられる。（小川）



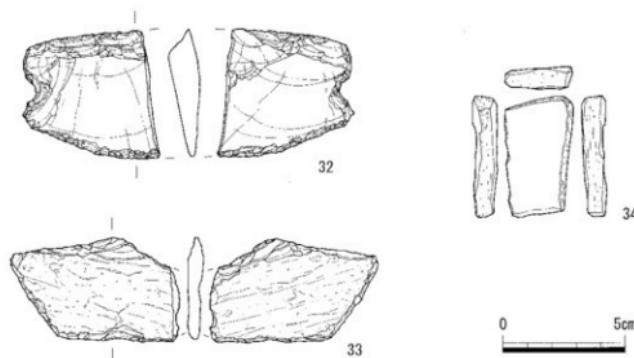
第29図 日暮・松林遺跡（事務所建設）第4トレンチ南壁土層図（縮尺1/40）

第30図 日暮・松林遺跡（事務所建設）第4トレンチ遺構平面図（縮尺1/100）

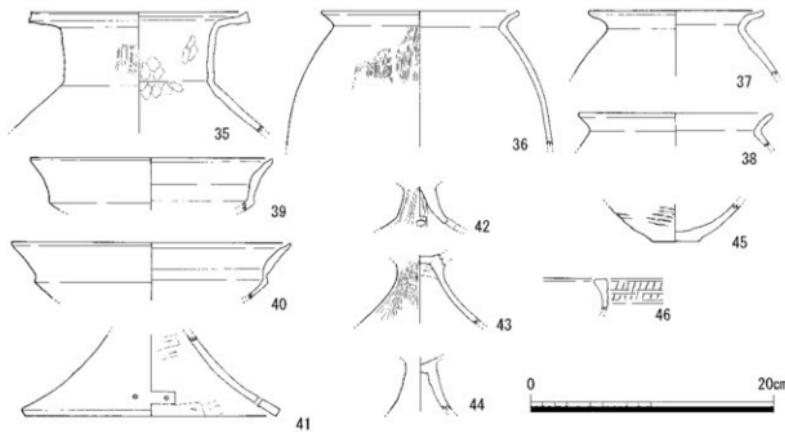
第31図 日暮・松林遺跡（事務所建設）第4トレンチ遺構断面・土層図（縮尺1/40）



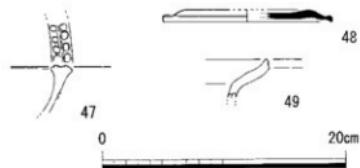
第32図 日暮・松林遺跡（事務所建設）第9・14トレンチ出土遺物実測図①（縮尺1/4）



第33図 日暮・松林遺跡（事務所建設）第9・14トレンチ出土遺物実測図②（縮尺1/2）



第34図 日暮・松林遺跡（事務所建設）第8トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/4）



第35図 日暮・松林遺跡（事務所建設）第11トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/4）



写真23 日暮・松林遺跡 第4トレンチ



写真24 日暮・松林遺跡 SA1

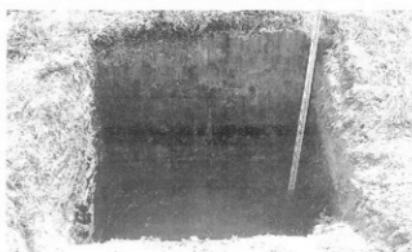


写真25 日暮・松林遺跡 第8トレンチ



写真26 日暮・松林遺跡 第10トレンチ



写真27 日暮・松林遺跡 第11トレンチ



写真28 日暮・松林遺跡 第12トレンチ



写真29 日暮・松林遺跡 第13トレンチ



写真30 日暮・松林遺跡 第9・14トレンチ

し せき さ ぬ き こく ぶ に じ あと  
史跡讃岐国分尼寺跡～第7次調査～

1. 調査地 高松市国分寺町新居
2. 調査期間 平成18年10月18日～20日
3. 調査担当者 渡邊誠、中西克也、西澤昌平
4. 調査の原因 内容確認
5. 調査の概要

a. これまでの経緯

讃岐国分尼寺跡に関する確認調査および立会調査はこれまでに6回実施されており、本調査で7回目である（第2表・第37図）。現在の法華寺境内に、残された礎石から金堂が存在したと想定されており、法華寺を中心として伽藍が展開すると考えられている。また、昭和57年度の調査（第2次調査）では、史跡地の南西部で南北方向に延びる溝が確認され、伽藍の範囲を区画する溝と想定されている。

しかし、これら以外には伽藍の規模や伽藍配置を示す明確な遺構は確認されておらず、讃岐国分尼寺の概要を解明することは大きな課題であった。

以上のような経緯から、本調査は、讃岐国分尼寺跡の伽藍の範囲を確認すること、具体的には伽藍を区画する北辺の東西方向の溝を検出し、寺域北辺の確定を行うことを目的として実施した確認調査である。当該地における東側に南北方向のトレンチを2本設定し、遺構の確認を行った。



第36図 史跡讃岐国分尼寺跡調査地位置図

年 度	次 数	地 番	調査主体	原 因	調査方法	遺 構	遺 物
昭和55年	第1次	新居2300	県教委	寺域等確認調査	トレンチ（4ヶ所）	第4トレンチで、地表下1.2m程で水を張えていたと考えられる厚さ20～40cmの灰色粘土層を検出。	軒瓦
昭和57年	第2次	新居2371-1 新居2372-1 新居2373-3	県教委	宅地造成に伴う現状変更	面的調査	A・Bトレンチで寺域を区画すると考えられる南北方向の溝を検出。その他、掘立柱建物、上礎を検出。	軒瓦、丸・半瓦、須恵器、土師器、灰釉陶器
昭和59年	第3次	新居2420-2 新居2420-7	町教委	住宅の改築に伴う現状変更	面的調査	2本の溝を検出。その他に、土甕、ピット群。	軒瓦、丸・半瓦、土師器
昭和61年	第4次	新居2378	町教委	法華寺の廃廩改築に伴う現状変更	トレンチ	なし	瓦
平成元年	第5次	新居2037-1 新居2037-2	町教委	現状変更	トレンチ	堆積土の確認	近世陶磁器片
平成14年	第6次	西側町道	町教委	水道管敷設工事に伴う現状変更	トレンチ	土層の確認、遺物採集	瓦など

第2表 史跡讃岐国分尼寺跡の調査履歴（第37図に位置表示）

b. 基本上層

第1トレンチは、おおむね上層から花崗土（造成土）、サト、床土、灰色もしくは灰黄色を呈する粘性のある砂質土、砂礫を含む灰オリーブ色を呈する粘性のある砂質土の順に堆積している。第2トレンチは、トレンチ北側部分の土層が第1トレンチとやや異なり複雑であるが、トレンチ南側は第1トレンチとはほぼ同じ堆積状況である。その北側部分では、床上が認められず、第1トレンチよりも地表面が約30cm程度高くなっている。このような状況から、この周辺が、水田もしくは農地として利用されるまでは自然地形の傾斜面が比較的残存していた可能性があること、さらにその自然地形を残した傾斜面は古代まで遡る可能性があり、尼寺造営にあたって大規模な造成は行われなかつたものと想定される。

### c. 遺構と遺物

第1トレンチでは、土坑もしくはピット状の遺構が確認された（第38図）。さらに、明確ではないが、トレンチ北側に瓦などの遺物がまとまって認められる箇所が存在することが明らかとなった。それらの遺構は、基本的に第5層から掘り込まれたもので、地山面に掘り込まれた遺構は確認されていない。瓦が集中して認められた箇所についても第5層に当たり、その瓦の分布する範囲に掘り込んでいるSK001やSK002などから出土した遺物は、各遺構が埋め戻される際に周囲の包含層に含まれていた周辺の瓦や土器と一緒に混入したものと考えられ、直接的な遺構の年代を示すものではないと考えられる。また、遺物の年代には幅があり、第5層の瓦などが集中して堆積していた箇所から出土した遺物が示す年

代は、国分尼寺跡が廃絶した後もしくは規模がかなり縮小した段階に造成もしくは何らかの廃棄行為などによって形成されたものと現段階では推定しておきたい。既述したように、第1トレンチの北側一帯には瓦や土器などが比較的まとまって認められる箇所があり、該当箇所にいくつかのサブトレンチを設定したが、堆積層は15~20cm程度で地山面に到達し、その下層に遺構が続くような状況は認められなかった。本調査は、トレンチ調査であるとともに、瓦が比較的まとまって堆積していた範囲やその形成要因について特定することが困難であることから、将来の面的な調査で疑問点を確認できるように、必要以上の掘削は行わず埋め戻した。一方、第2トレンチでは、明確な遺構は特に確認されなかった。次に出土遺物を図化できた遺構について述べておく。

#### SK001(第39図-1)

検出状況で、炭化物を多量に含む土が溝上に堆積しており、遺構北側からSK001の下層に潜りこむような落ち込みが壁面で確認できたため、区画溝である可能性が想定された。しかし、第2トレンチに統かない点、地山面の直上で遺構の掘り込みが終了している点などから、帶状の土坑であると考えられる。SK001は、東側をSX012に切られ、SK002の一部を切っており、調査区の西へとさらに延びる。

出土遺物(1)は、土師器の小皿で、口径は10.0cmに復元できる。口縁部周辺のヨコナデの状況が明瞭に確認できる。時期は中世以降と考えられる。

#### SK002(第39図-2・3)

SK001に切られ、トレンチ東側へとさらに続く直径約2.2mの円形の土坑である。掘り込みは浅く、SK001と同様に地山面の直上で遺構の掘り込みが終了している。

出土遺物は白磁の碗(2)と四耳壺(3)で、分類では前者がV-4類(b×c)、後者がIII類に該当する(山本2000)。これらの遺物の年代は12世紀後半~13世紀前半の中で捉えることが可能である。

#### SP007(第39図-4)

小形のピットで、トレンチの西側に続いている。掘り込みは浅い。

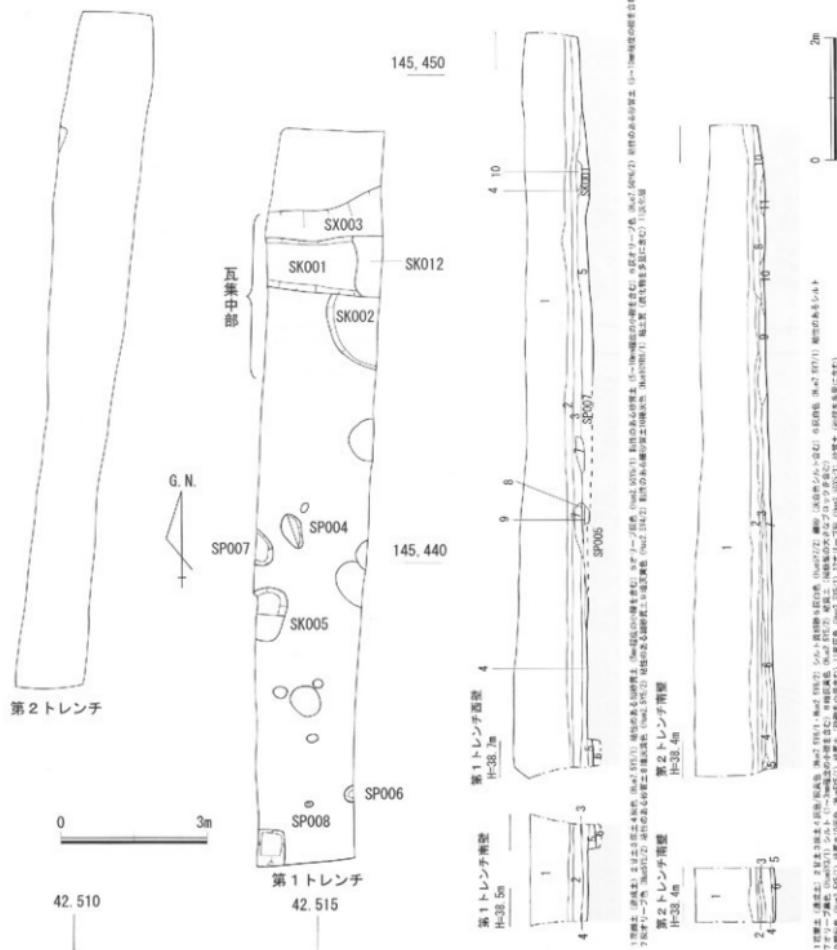
出土遺物は、土師器の小皿の口縁部片(4)である。

#### 瓦集中部(第39図-5~12)

既述してきたように、SK002付近を南限としながら、南へと落ち込む遺構SX003までの範囲に瓦や土器が比較的まとまって出土する状況が認められた。これは明確な遺構に伴ったものではないが、集中的に出土しているので、いくつか取り上げを行った遺物について述べておく。土師器壺(6)や鉢(5)、須恵器の碗や壺の口縁部片など(7・8)が出土している。瓦は軒丸瓦(9)、丸瓦(10)、平瓦(11・12)が



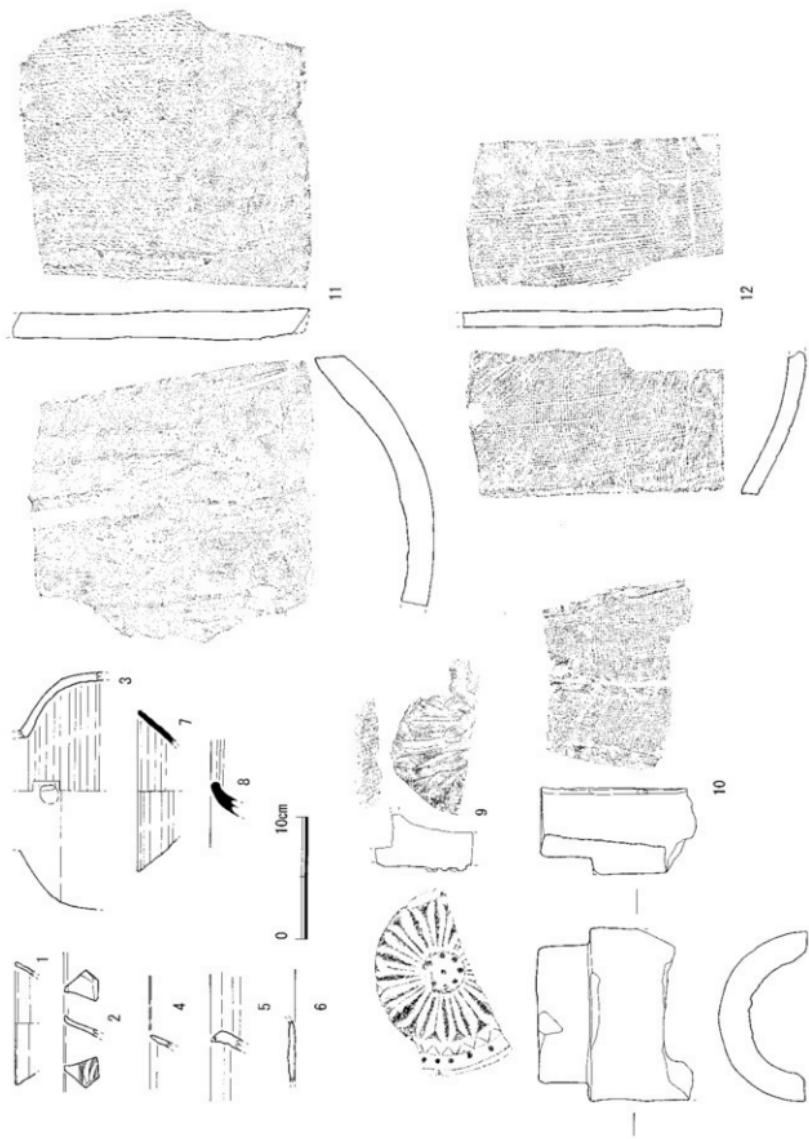
第37図 史跡讃岐國分尼寺跡におけるこれまでの調査箇所

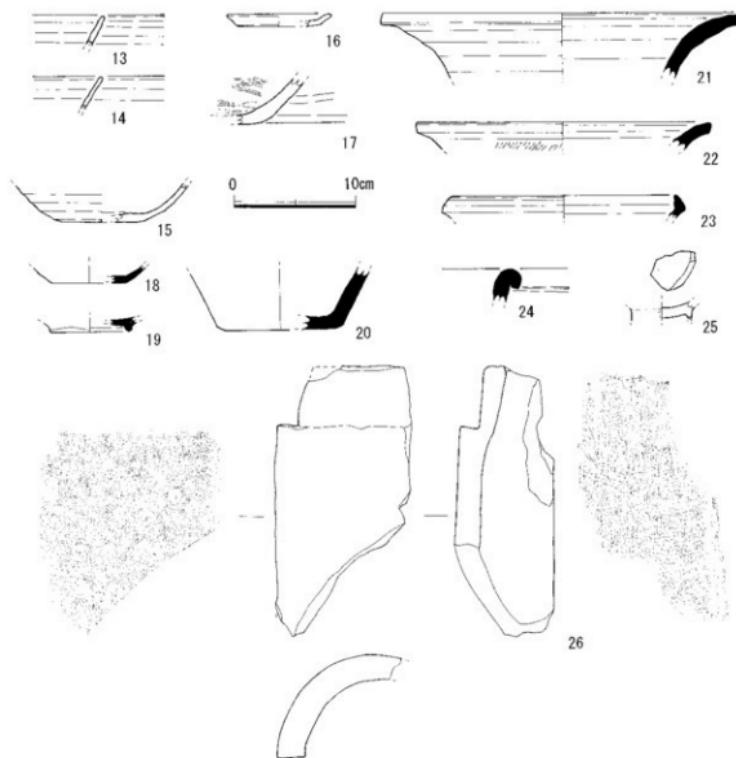


第38図 史跡讃岐国分尼寺跡 遺構配置図（縮尺1/100）土層断面図（縮尺1/80）

確認された。9は十六葉細弁蓮華文軒丸瓦で、尼寺の創建期の軒丸瓦と考えられている。接合式で、接合部には転写された接合した丸瓦の凹面の布目が残っている。瓦当面裏側には縦方向に粘土をなでつけた様子が明瞭に確認できる。10は、丸瓦で凸面はナデ調整によって仕上げ、凹面には布目が残る。11・12は凸面繩目叩きによって整形し、前者は、広端部付近を横方向のナデ調整によって仕上げている。凹面は、布目が残るが、前者は最終的にナデ調整によって仕上げている。このほかにも壇の破片なども出土している。

第39図 史跡横枝国分尼寺跡 遺構および瓦集中部出土遺物実測図（縮尺1/4）





第40図 史跡讃岐国分尼寺跡 遺構検出時出土遺物実測図（縮尺1/4）

#### その他(第40図-13~26)

以上のほかに、遺構検出時に第40図のような遺物が出土している。土師器壺や小皿の破片(13~15)、土師質土器鉢(17)、須恵器壺(18)、椀(19)、底部(20)、壺(21・22)、束縛系鉢(23)、備前焼壺(24)、染付碗(25)、丸瓦(26)などの破片が出土している。これらの遺物の時期については幅があり、遺構の埋土も大きく2つに分かれることなどを考慮すると、これらの遺物も2時期以上に分かれることを示しているものと考えられる。

#### 6.まとめ

調査の結果、北辺を区画する東西方向の構は調査区範囲の中では確認することができなかったが、多量の瓦片が一定の範囲に含まれている状況が明らかとなった。さらに、寺域北限を示す遺構が確認できなかったことから、伽藍の範囲はさらに北へと延びる可能性が指摘できる。出土遺物には造営時期の瓦のほかに、12世紀後半から13世紀前半に比定できる白磁の四耳壺・白磁V類の確などが認められることから、これまで想定されていたよりも新しい時期まで尼寺が何らかの形で存続した可能性が高いこととなった。さらに、これらの遺物から推測できることは、少なくとも古代末～中世初頭において、規模が縮小していたとしても、尼寺が白磁などの貿易陶磁を入手可能な状況にあったことを示すものである。なお、瓦などが集中して堆積していた範囲やこの範囲を含む土層(第5層)は13世紀以降に形成されたものと想定される。(渡邊)



写真31 史跡讃岐国分尼寺跡  
第1トレンチ遺構検出状況(北から)



写真32 史跡讃岐国分尼寺跡  
第2トレンチ遺構検出状況(北から)



写真33 史跡讃岐国分尼寺跡  
第1トレンチSK001半掘状況(東から)



写真34 史跡讃岐国分尼寺跡  
第1トレンチSK001完掘状況(東から)



写真35  
史跡讃岐国分尼寺跡  
第1トレンチSK002お  
よび瓦集中出土箇所  
全景(東から)

## 第2章 平成17年度 史跡天然記念物屋島基礎調査事業（屋嶋城跡）

- 調査地 高松市屋島東町1782-1
- 調査期間 平成17年11月1日～平成18年3月28日
- 調査担当者 山元敏裕
- 既往の調査概要（第42・43図）

平成17年度の調査地については、平成10年1月の外郭線城壁の発見以来、これまでに3度の確認調査を実施している。平成12年度の確認調査では、遺構と考えられる石積みなどの存在を確認するのみであったが、続く平成13年度の確認調査では城門を確認し、これまでの調査では確証が得られていないかった屋嶋城の存在を確固たるものとした。確認した城門は福岡大学(当時)の小田富士雄氏による現地での検証が行われ、床面がこれまで確認されている古代山城の城門床面とは異なり、階段状を呈する構造から「屋島型城門」とのコメントを戴いた。確認した城門の規模についても、国内では大野城大宰府口城門に次ぐ規模をもつことが判明した。この他、床面下部の構造として、鬼ノ城北門に続く2例目となる排水溝を確認した。外郭線城壁石積みの背面には、外郭線城壁に平行して、城内側に面をもって存在する列石（背面列石A）と城門右奥側で城外側へ面をもち、弧状を呈する列石（背面列石B）を確認したが、前者は城壁土壘背面裾に一般的に見られる列石であることが判明したもの、後者については、列石Aとの接点が認められず、遺構の性格についての判断は、持越しとなった。このように平成13年度の確認調査では、他の古代山城との構造面での共通点を多く見出すとともに、屋嶋城に特有な構造も判明した。続く平成15年度の確認調査では、城門前面石積みに段差を設ける「懸門」構造をもつこと、城門奥側の岩盤を遮断塀として活用し、城門内の門道や北側側壁を城外から向かって左側（北）へ屈曲させる構造をとること、また平成13年度の調査で城壁外郭線石積みの背面において確認していた列石（背面列石A）については、傾斜が南西方向へ下り始める辺りで不明瞭となっていたが、南西方向へ下る地形の変化に応じて土壘背面裾部を列石から石積みに変化させている状況を確認するなど、堅牢な防御施設であると共に、構造物を維持するため多くの工夫がなされていることが判明した。

### 5. 平成17年度の調査概要

#### （1）調査区の設定

平成17年度の確認調査では、既往の調査成果を受け、城門上屋構造・城壁内部構造を解明するため、両側壁の背面にトレレンチを設定した（第1・2トレレンチ）。このほか、城門外郭線城壁のうち、高石垣と呼んでいる最も残りの良い外郭線石積みから南西方向へ折れる城壁には、現状では明確な石積みが認められないことから、石積みの有無および城壁の内部構造を確認する目的でトレレンチを設定した（第3トレレンチ）。各トレレンチの概要については、以下のとおりである。

#### （2）各トレレンチの概要

##### ① 第1トレレンチ（第44・45・47図）

南側壁の背面（南）の状況を確認するために設定したトレレンチである。当トレレンチでは、城壁の構造を考える上で多くの成果を得た。以下、トレレンチにおいて確認した遺構ごとに記述する。

##### 土壘部分

南側壁の南2mにおいて東西方向の石積みを確認した。



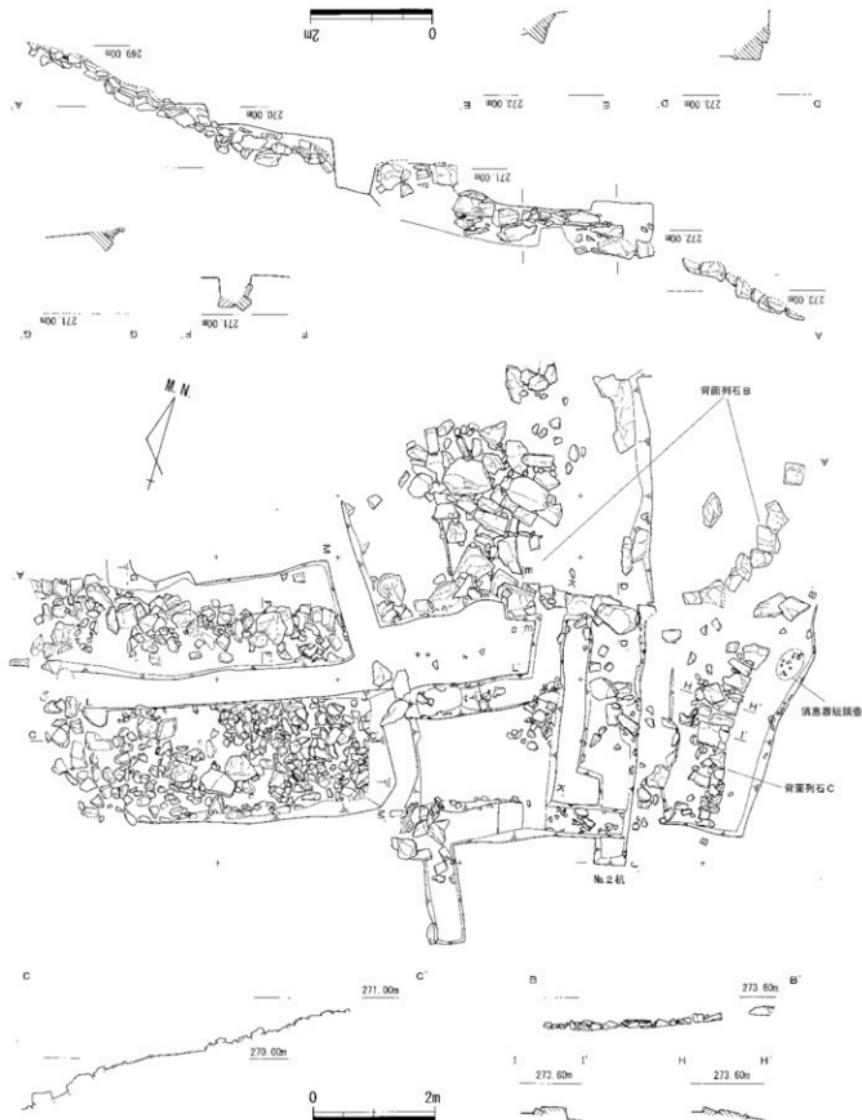
第41図 屋嶋城跡関係遺構位置図



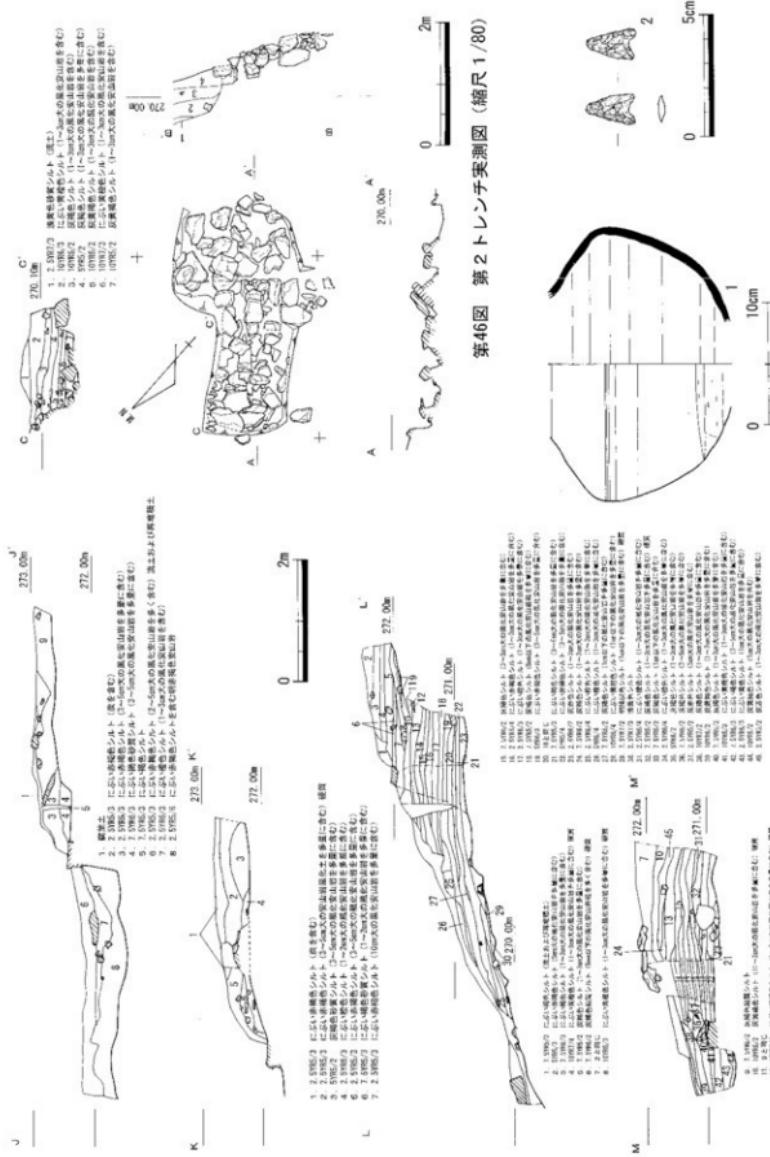
第42図 平成17年度調査地点トレンチ配置図（縮尺 1/400）



第43図 城門および城門周辺部遺構図（縮尺 1/120）



第44図 第1トレンチ実測図（縮尺1/80）



- 45 -

石積みの規模は、確認長7m、高さは40~60cmであるが城外側へ行くに従い高さを下げ、城壁である石垣の天端に繋がる。一方の城内側については、後述する背面列石Bと重なり合うように続いているようであり、上部の列石遺構を壊す恐れがあることから、その先については確認できていない。確認した石積みの特徴として厚さのあまりない石材を最大で4石使用して積上げているが、石積みの面も揃わず、非常に粗い積み方である。

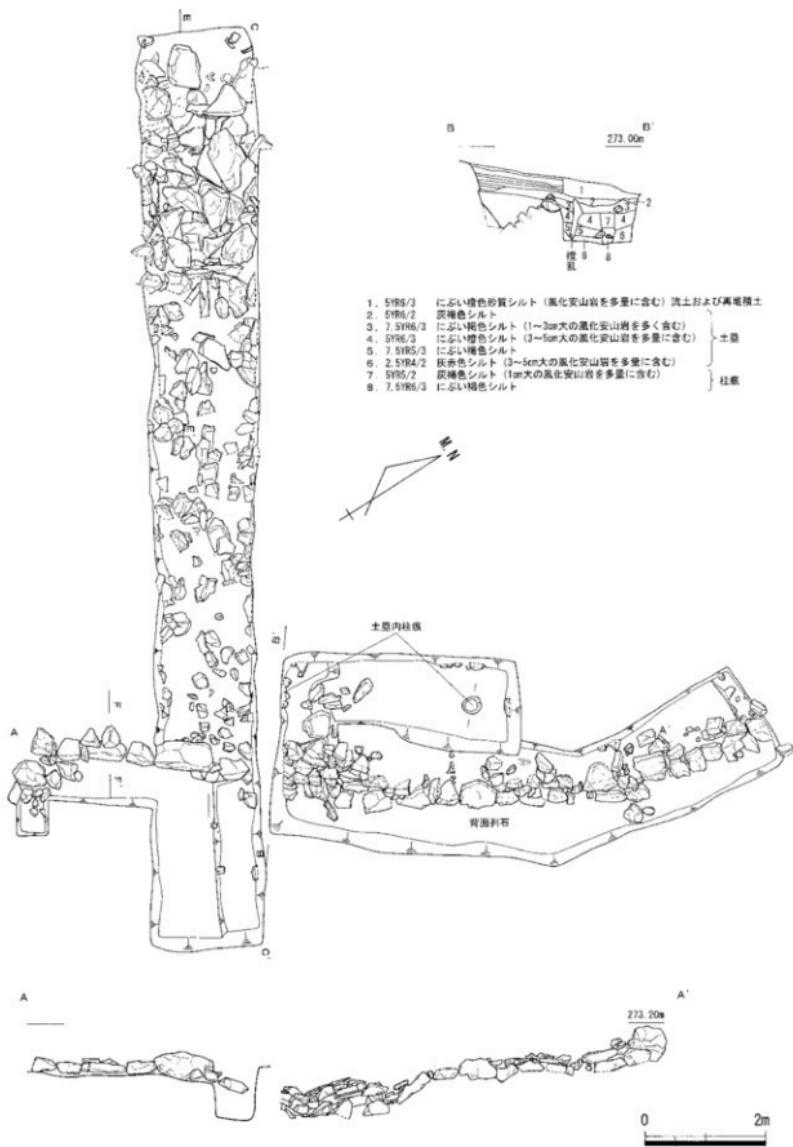
今回確認した石積みの背面では、トレントの下部において安山岩の礫敷きを確認した。その範囲はトレントの西側部分の南北3m、東西5mの範囲である。礫敷きに使用されている礫の規模は、20cm以上のものが多くを占めるが大きなものは60cmを超えるものまで存在する。礫敷きの上面の標高は、山側が270.8m、谷側が269.2mであり、1.6mの差がみられる。礫敷きの上面についてはゆるやかな斜面を形成し、城壁石垣の天端に繋がる。礫敷きについては上面を確認したのみで、下部については確認を行っていないが、ある程度の厚さをもっているものと考えられる。トレント南端の土層の下部でも認められることから、この礫敷きは南側へ伸びているものと考えられる。礫敷きの上部には、土壌の盛土であると考えられる5~10cmの厚さで版築状に積み上げられたシルト質の土層を確認した。L-L'の十層図において、各盛土は、礫敷きが認められた部分は傾斜しているものの、下部が水平となる東側では、ほぼ水平に近い状態で積上げられている。最も残りの良い部分では1.4mの高さをもつ。層によって3~5cm程度の風化安山岩を含むものもみられるが、良質な上で堅く積上げられている。これらの盛土は、前述の石積みの背面（南）側と前面（北）側では、層の厚さも堅さの縮まり具合も異なり、後者の方が全般に作業が粗い。

#### 背面列石B

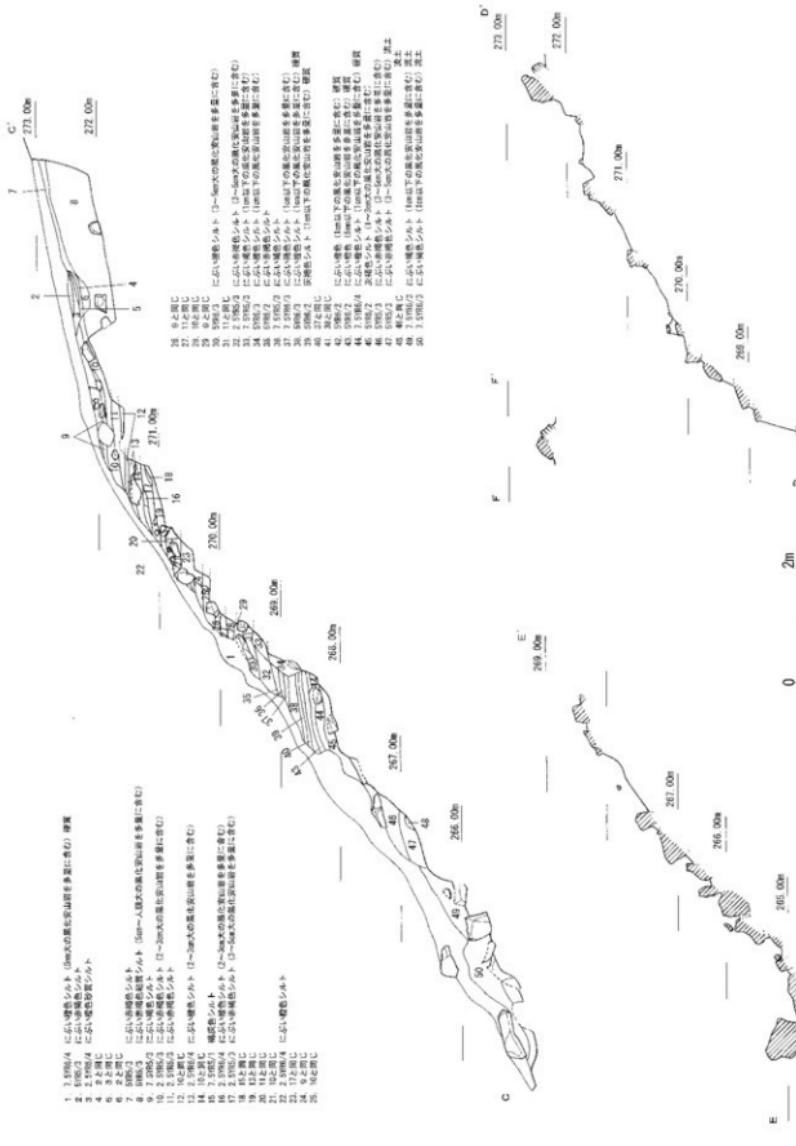
城門の南東部、今年度の第1トレント北東部にある。この背面列石は、城内側に面を揃える一般的な背面列石とは異なり、城外側に面を揃え、南西側へ高さを下げるとともに、平面的には弧状を呈することが平成13年度の確認調査によって判明していた。平成13年度の確認調査では、西側延長部分が土砂によって埋没しており、遺構の状況が不明であったことから確認調査を行ったものである。確認調査の結果、埋没して不明であった部分にも列石を確認し、面を揃えながら、平面的には北側に向くU字形を呈することが判明した。使用している石材の規模は、長さ50~60cm、厚さ20~30cmであり、他の背面列石に比べて大振りの石材を使用している。背面列石Bの西側部分に集積した状況で確認した安山岩は、背面列石に使用していた石材の崩れたものが、今回確認した位置で列石に引っ掛かり留まつたものと考えられる。このことは、東側の列石の多くが基底石と考えられる1石のみであるのに対して、断面図を作成したD-D'、E-E'付近では2~3石積上げている部分を確認していることからも、現在は1石のみ残存である部分も、本来は2~3石を積上げていた可能性が高いと考えられる。背面列石Bが断面にかかるように設定したJ-J'、K-K'の土層断面では、列石上部の盛土は石積み南側で確認した細かな土層ではなくやや粗い層で積まれている。

#### 背面列石C

第1トレントの南東部、背面列石Bの南側で確認した列石である。外郭線城壁石積みに対応する城内側に小口面を揃える背面列石AがNo.2坑の南側で不明瞭となることから、その延長部分を確認する目的でトレントを設定し、確認調査を実施した。しかし背面列石Aの北側延長部は明確とならず、第1トレントの南東端で城内側に使用石材の小口面を揃える列石を確認したにとどまった。背面列石Cについては、第1トレント東端での確認であり延長部分の十分な確認は行えなかったが、全長4mを確認した。平面形は背面列石Bと同様に弧状を呈する。列石の傾斜は緩やかに南側へ下る。使用している石材の規模は長さ10~20cm、厚さ10cm、奥行40~50cm程度の板石であり、石材の規模は統一されていない。他の背面列石に比べ、高さがない。この列石は比較的平坦な部分に造られていること、周辺部に散乱した板石も認められないことから、現在の列石の上部に石積みがあったとは考えられず、築造当初からの状況を保っているものと考えられる。北側の続きを確認していないことから不明な点が多いが、北側では背面列石Bを前面とすると背面列石Cが後面に対応する列石の可能性が高い。ただし南側に行くに従い方向が異なるため、南側の状況については現在のところ不明である。背面列石



第48図 第3トレーンチ実測図1 (縮尺1/80)



第49図 第3トレンチ実測図2 (縮尺1/80)

Cの北端近くの地山直上から第47図に示した須恵器短頭壺が破片となって出土した。

#### 第1トレンチ出土遺物

背面列石Cの東側北端近くで出土したものである。1は須恵器短頭壺である。口縁部および底部を欠損する。体部が張り体部最大径付近に凹線1条を巡らす。底部外面にヘラケズリが認められる。2は須恵器短頭壺近くから出土した凹基式の石鏡である。両面とも丁寧な調整が施されている。

#### ② 第2トレンチ（第46図）

北側壁の背面（北）の状況を確認するために設定したトレンチである。当トレンチでは、調査範囲が狭かったが、第1トレンチと同様に城壁の構造を考える上で多くの成果を得た。第1トレンチの調査成績と同様に城門北側壁から2m北側で石積みを確認した。設定したトレンチの関係から確認範囲は狭いものの長さ2mを確認した。第1トレンチで確認した石積み同様、石材の規模は、長さ20～50cm、厚さ20cm程度であり、基礎部の石材に比べ上部の石材が大きい等、規格の統一はみられないが、奥行のある石材を使用している。積み方は非常に粗く、辛うじて石積みのラインがわかる程度である。石積みの最も残りの良い部分で高さ50cmである。石積みの背面となる北側は、第1トレンチと同様にトレンチ底で石材を確認したが、石積みとほぼ同規模の石材を使用しており、石の上面も均一ではない。石積み背部に充填された石材の上部には、やや積み方は粗いものの、10cm程度の単位で積上げられた土層を確認した。確認した範囲は狭いが、水平に近く積み上げられており、土も堅く締まっていることから、第1トレンチと同様に土壘の盛土であると考えられる。

#### ③ 第3トレンチ（第48・49図）

城門を挟んで両側の外郭線城壁石積みは高さ3m程度であるが、城門南側壁の袖石から10mほど南で高石垣と呼んでいる高さ約5mの石積み部分が存在する。この高石垣を挟んで外郭線城壁は南西方に向角度を変えるが、高石垣から南西方への部分には外郭線城壁の石積みが認められないことから、城壁の内部構造を確認するため、外郭線城壁に直交する形でトレンチを設定し調査を行った。外郭線城壁前面部では石積みとその上部に上墨を確認し、城壁背面では列石を確認した。以下、トレンチ内で確認した遺構ごとに報告を行う。

#### 外郭線城壁石積み

高石垣から南西方向へ伸びる石積みを確認した。上部からの上砂によって50～60cm程度埋没し、石積みの崩落が著しく、本来の石積みの状況を保っている部分は少ないものの、高さ3m程の規模をもつ。確認した標高は異なるが、高石垣より北側の城壁石積みの基底部からの高さと同じである。石積みに使用している石材の規模は長さ60cm～1m、厚さ60cm前後であり、高石垣下部の石材規模同様、比較的大きなものを使用している。

#### 土壘

外郭線城壁石積みの上部で、第1トレンチと同様に上墨の盛土を確認した。盛土は安山岩が風化したシルト質のものを使用して厚さ10～20cm程度で積上げられている。土壘盛土は下部の方が薄く混入している風化安山岩は、塊が小さく量が少ないが、上部にいくに従い塊は大きく量も多くなっている。

#### 土壘内柱痕

第3トレンチ北側の土層では、土壘盛土内に風化安山岩が多量に混入しており、十分な上層観察が行えないことから、平成15年度に確認調査をした第6トレンチ部分を再掘削した反対側の壁面土層で確認した。壁面のみの観察であるが、確認した柱痕は背面列石の裾から1.8m入った土壘の内側に存在し幅20cm、深さ50cmである。この柱痕から北へ約3m、背面列石裾から1.7mの距離で直径30cmの柱痕を確認した。土壘盛土の土層と柱痕の土層の識別に手間取り、確認できたのは下部のみである。

#### 背面列石

第3トレンチは平成15年度に確認調査をした第6トレンチの南側に隣接する。平成15年度第6トレンチでは北側から続く列石を確認したが、トレンチの南端付近で列石から石材を数段積んだ石積みへと変化させている部分を確認した。調査期間との関係から、それよりも南側へのトレンチ拡張を行わなかったことから背面の石積みは連続するものと想定していた。しかし、今回の第3トレンチの確認

調査によって平成15年度第6トレンチで確認した石積みは第3トレンチへは伸びず、局所的なものであることが判明した。

第3トレンチでは、北端近くの列石が傾斜をもつものの、それよりも南側の列石は傾斜をもたないことが判明した。ただし、確認した背面列石はトレンチ北端から4m南で止まり、その列石付近には、列石の使用に手頃な石材が散乱していたが、それよりも南側では認められなかった。

## 6. 調査のまとめ

平成17年度の確認調査におけるトレンチの概要については、前述したとおりである。最後に平成17年度の調査成果について、これまでの調査成果と合わせて簡単にまとめを行っておきたい。

### ① 第1・第2トレンチで確認した石積み

両側壁から2mの距離において積まれた石積みについては、確認当初、側壁上部に幅2mの平垣面、その背後に露出した石積み構造を想定したが、土壌盛上中に埋没していたにもかかわらず、石の積み方が粗く、石積みを挟んで盛土の積み方が異なっていることから、石壁上部に積んだ盛上の城門内への崩落を防ぐための石積みであったものと考えられる。上墨完成後は露出させずに、土墨内に埋没させることが前提であったため粗い積み方になったものと想定される。

### ② 背面列石B・C

平成13年度の確認調査で確認した背面列石Bについては、平面形は曲線を描くU字形になることがほぼ確定的となつたが、今回、その南側で新たに背面列石Cを確認した。列石の配置状況から背面列石Bは上墨前面間に配置された列石であると考えられ、背面列石Cについては土壌背部間に配置された列石であることは理解できるが、第1トレンチの検出状況からは、南へいくに従い両列石の方向が異なつておる、どのような土壌構造になるのか、現在のところ不明である。一部の確認に止まつた背面列石Cについては、どのような広がりをもつのか、今後の確認調査が必要である。

### ③ 石敷きと土壌盛土

第1トレンチではトレンチ下部で安山岩の石敷きを確認した。石敷きの全容は確認できなかつたものの、石敷き上面の高さは外郭線城壁石積みの天端に向けて傾斜していることが判明した。石敷き下部については調査を行っていないが、外郭線城壁石積みの裏込めである可能性が考えられる。この石敷きの上部には、層の厚さが10cm程度に細かく積み上げられた盛土を確認した。この盛土は第3トレンチでも同様な層位が確認されており、城門周辺部の背面列石が認められる範囲については、同様の丁寧な盛土が施されていたものと想定される。

### ④ 背面列石Aの南端の状況

平成15年度第6トレンチで確認した背面石積みは、地形の変化に対応する形で構築されたもので、第3トレンチの確認調査によって局所的なものであることが判明したが、緩い谷部を埋めて列石にしなかつたのは、城内から流下した雨水がこの部分に流れ込み、城壁を壊す可能性が考えられたことや、周辺部の状況から、土壌に必要な土よりは、石積みに使用する石材の方が得やすかったということも考えられる。

### ⑤ 外郭線城壁南端の状況

高石垣から南への城壁の状況が不明であったが、下部は高さ3mの石積み、上部は高さ4mの上墨で構築されていることが判明した。この構造は高石垣を挟んだ北側の状況と同様である。石積みでは、外郭線が大きく屈曲する部分の高石垣が城壁の上端まで石積みであるのは、高石垣の背面部分が分水界で、城内からの雨水が集まりやすい部分にあたり、他の箇所と同様な上墨では崩落の危険性が高く、あるいは構築中に崩落をみたやも知れず、この部分は特に堅牢に構築したものと考えられる。このような構造は、総社市鬼ノ城の西門から第0水門にかけての外郭線城壁石積みにその類例をみることができる。

## 参考文献

村上幸雄 松尾洋平2005『古代山城 鬼ノ城 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査-』岡山県総社市教育委員会



写真36 第1トレンチ内完掘状況(南から)



写真37 第1トレンチ東部完掘状況(南から)



写真38 第1トレンチ内石積み(東から)



写真39 第1トレンチ内石積および石敷(東から)



写真40 第1トレンチ土塁盛土状況(西から)



写真41 第1トレンチ内石積み周辺盛土状況(西から)



写真42 背面列石Cおよび遺物出土状況(北から)



写真43 第2トレンチ完掘状況(南から)



写真44 第2トレンチ内石積検出状況(東から)



写真45 第3トレンチ調査前状況(北から)



写真46 第3トレンチ完掘状況(南から)



写真47 背面列石B検出状況(東から)



写真48 外郭線石壘検出状況(北から)



写真49 第3トレンチ土壁内柱痕検出状況(東から)



写真50 土壘内柱痕検出状況(東から)



写真51 第3トレンチ土壁内盛土状況(西から)

## 報告書抄録

ふりがな	たかまつしないいせきはくつちょうさがいほう							
書名	高松市内遺跡発掘調査概報							
副書名	平成18年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第101集							
編著者名	川畠 駿、山元敏裕、小川 賢、渡邊 誠、西澤昌平、大久保徹也							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087(839)2636							
発行年月日	平成19年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
多肥下町 山道地区	高松市多肥下町	37201		34° 17' 50"	134° 03' 26"	H18. 1.11	40m <sup>2</sup>	店舗建設
香西東町 新田地区	高松市香西東町	37201		34° 20' 22"	134° 00' 24"	H18. 1.17	92m <sup>2</sup>	都市計画 道路建設
桜町二丁目	高松市桜町二丁目	37201		34° 19' 31"	134° 03' 04"	H18. 3. 8 ~ H18. 3. 9	96m <sup>2</sup>	宅地造成
口暮・松林遺跡 (共同住宅建設)	高松市多肥上町	37201		34° 17' 47"	134° 03' 30"	H18. 4.25	40m <sup>2</sup>	共同住宅 建設
林町 龜ノ町地区	高松市林町	37201		34° 17' 45"	134° 04' 30"	H18. 6. 1	45m <sup>2</sup>	事務所建 設
平尾1号墳	高松市前田西町	37201		34° 18' 11"	134° 07' 08"	H18. 7. 3 ~ H18. 7. 14	250m <sup>2</sup>	自然崩壊
西下遺跡	高松市川西町	37201		34° 16' 29"	134° 06' 10"	H18. 7.28	7m <sup>2</sup>	校舎増築
多肥下町 下所遺跡	高松市多肥下町	37201		34° 18' 10"	134° 03' 33"	H18. 8.16	108m <sup>2</sup>	消防署建 設
金石2号墳	高松市前田西町	37201		34° 18' 22"	134° 07' 18"	H18. 8.21 ~ H18. 8.30	370m <sup>2</sup>	内容確認
岡山小古墳群 11号墳	高松市新田町	37201		34° 19' 12"	134° 06' 40"	H18. 10. 2 ~ H18. 10. 3	8m <sup>2</sup>	病棟新築
日暮・松林遺跡 (事務所建設)	高松市多肥上町	37201		34° 17' 47"	134° 03' 28"	H18. 10.10 ~ H18. 10.12	100m <sup>2</sup>	事務所建 設
史跡 讃岐国分尼寺跡	高松市国分寺町新居	37201		34° 18' 38"	133° 57' 42"	H18. 10.18 ~ H18. 10.20	52m <sup>2</sup>	内容確認
屋嶋城跡(城門)	高松市屋嶋東町	37201		34° 21' 15"	134° 06' 19"	H17.11. 1 ~ H18. 3.28	100m <sup>2</sup>	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
多肥下町山道地区		弥生～古代	旧河道	土師質土器	
香西東町新田地区					
桜町二丁目					
日暮・松林遺跡	集落	弥生	溝	弥生土器	
林町龟ノ町地区	集落	弥生, 江戸	溝, 柱穴	弥生土器	
平尾1号墳	古墳	古墳	墳丘, 石室	須恵器	
西下遺跡	集落	奈良, 室町	土坑, 柱穴	須恵器, 土師器	
多肥下町下所遺跡	集落	不明	溝, 柱穴		
金石2号墳	古墳	古墳	墳丘, 石室		
岡山小古墳群 11号墳	古墳	古墳	墳丘		
日暮・松林遺跡	集落	弥生	溝, 柱穴	弥生土器, 石器	
史跡讃岐國分尼寺跡	社寺	古代～中世	土坑, 柱穴	須恵器, 土師器, 瓦	
原嶋城跡（城門）	城館	古代	城門	須恵器	

#### 《引用・参考文献》

山本信夫2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編一』太宰府市教育委員会



第39図 9 の写真

#### 高松市内遺跡発掘調査概報

—平成18年度国庫補助事業—

平成19年3月30日発行

編集 高松市教育委員会  
発行 高松市番町一丁目8番15号  
印刷 有限会社 河端商会